

PHASE 3

次世代高齢者研究報告書

幸福感についての考察

～ データ分析と有識者インタビュー～



2019年6月

公益財団法人ハイライフ研究所

Research Institute for High-Life

次世代高齢者研究報告書

幸福感についての考察

～データ分析と有識者インタビュー～

(PHASE3)

2019年 6月

公益財団法人ハイライフ研究所

〈目次〉

第1部 研究概要	3
1 研究背景と次世代高齢者研究 -----	4
2 研究プロセス -----	6
3 研究体制 -----	6
第2部 幸福感、生活満足に関する分析 ～幸福感や生活満足に繋がる属性や意識とは何か～	7
1 過去の分析のポイント -----	8
2 本研究の視点について -----	10
3 分析データ（次世代高齢者調査）の概要 -----	12
4 分析結果 -----	14
5 分析のまとめ -----	20
第3部 有識者インタビュー	23
1 有識者インタビューのこだわり -----	24
2 取材させていただいた方のプロフィール -----	24
①池田 敏秀 氏 -----	26
②岡田 信一 氏 -----	34
③川崎 友嗣 氏 -----	42
④成本 迅 氏 -----	50
第4部 むすびに	59

第 1 部

研究概要

研究背景と次世代高齢者研究

「都市を中心とした生活者のよりよい生活の実現・構築へ向けた調査・研究事業」という財団の事業理念をもとに、これからの時代が抱える問題を解決すべく基本方針「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」を踏襲し、調査・研究事業と啓発・活動事業の枠組みのもと、それぞれの内容の充実・高度化を当財団は目指してまいりました。

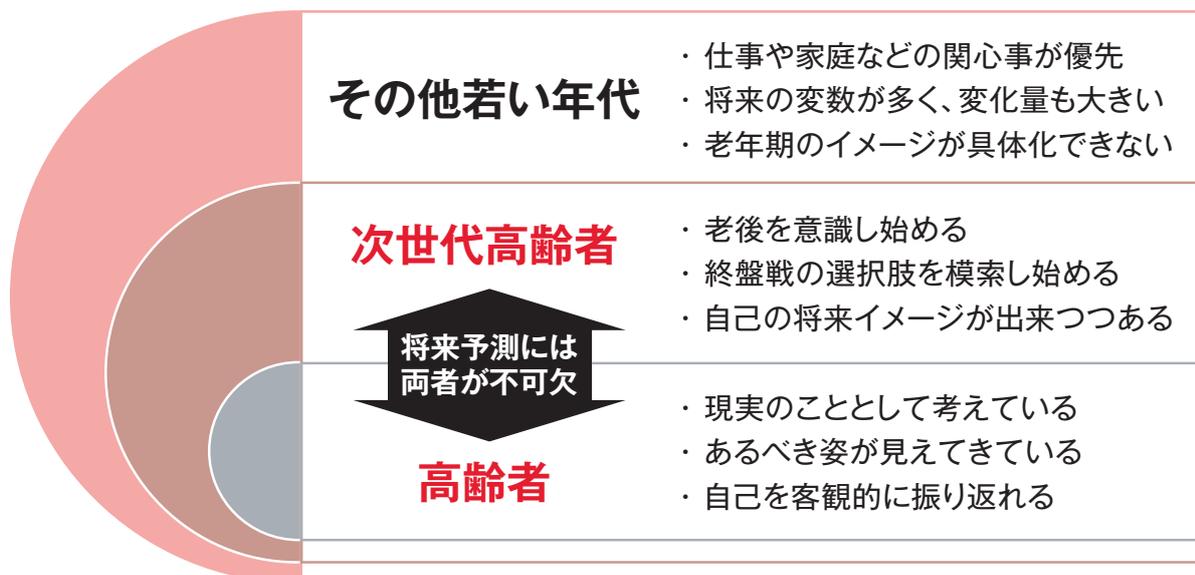
「次世代高齢者研究」においては、PHASE 1「変化し続ける高齢者意識の研究」(2017年9月)、PHASE 2「超高齢社会を生きる～インタビュー調査による示唆～」(2018年9月)と報告させていただいており、本研究報告書はPHASE 3となります。また、第30回ハイレイフセミナー「超高齢社会の生き方のヒント」(2018年3月実施：報告書は6月)においても、研究の一部をご紹介します。

次世代高齢者

そもそも高齢者の予備段階として、『次世代』高齢者という設定を致しております。その設定に関して最初に再確認して、本報告を始めたいと思います。

ご存知のように高齢者の定義は統一、確定されたものではありません。そして個人差や環境、国や地域ごとに差異があることは言うまでもありません。本研究においては、WHO(世界保健機関)の定義により65歳以上を高齢者とし、研究を進めておりますが、高齢者の将来、より高齢化する日本社会を考察する上で、その下の年代、即ち次世代の高齢者を研究対象とし、比較などを行うこととしました。次世代高齢者とは、高齢者としての自覚はないものの、高齢者になることを想定し、その準備なども行う世代と言えます。(図表1参照)

図表1 次世代高齢者研究の対象者の考え方図



《研究の特徴》

「次世代高齢者研究」において、我々は図表2の区分を設けました。【調査実施は2016年10月】

まず、高齢者を66歳から75歳としました。これは、団塊世代を1946年～1950年生まれの5年間とし、まずボリュームゾーンである団塊世代を含むことと70代に入っている年齢も含むということで、戦中生まれ世代（1941年～1945年生まれ）と併せることとしました。

次に次世代高齢者の設定ですが、当初は56歳～65歳を想定しましたが、60代の前半に既に年金生活が始まる人、会社務めで現役の人、退職直後で試行錯誤中であったり彷徨っていたり、男性のみならず配偶者の変化といったことで女性においてもその傾向があり、敢えて61歳から65歳は次世代高齢者から外すこととしました。その結果として、51歳～60歳を次世代高齢者としました。この年代は、年金受給は開始されておらず、生計を立てるべく会社勤めなどを行っています。そういった共通のステージを考慮すると、50代（厳密には51歳～60歳）を次世代高齢者として分析することで、高齢者との比較を行いやすいと考えました。

また、全体を通じて、影響力が大きい団塊世代に注目しております。高齢者などの対象区分とともに、包含する世代を示しており、参考にさせていただきたいと思います。（世代名称や区分については他の分類もありますが本研究では下図の通りとしました）

図表2 研究対象の区分

（※2016年10月調査実施時点）

対象の区分	年齢幅	研究対象としての位置づけ	包含する世代
次世代高齢者	51歳～60歳	・まだ老後という意識はなく、年金受給もない ・ほぼ家庭環境や仕事等の社会的将来像が見えつつある	51～55歳 新人類 (1961～1965年生まれ)
			56～60歳 POPEYE・JJ世代 (1956～1960年生まれ)
准高齢者	61歳～65歳	・環境変化の真っ只中 ・現実と老後意識が入り乱れる	61～65歳 ポスト団塊世代 (1951～1955年生まれ)
高齢者	66歳～75歳	・高齢者としての生活もスタートし、将来図が定まりつつある ・しかし、後期高齢者の段階に備える意識も強い	66～70歳 団塊世代 (1946～1950年生まれ)
			71～75歳 戦中生まれ世代 (1941～1945年生まれ)

以降、本文中では、上記区分の次世代高齢者を次世代高齢者層と表記し、高齢者を高齢者層と表記します。（但し、インタビューにおける発言に関しては、基本的に発言のままで記載しております）

研究プロセス

■ 次世代高齢者調査 2016

東京 30 km圏に在住の満 51 歳～ 75 歳一般男女が調査対象
男女別に 5 歳刻みで 5 グループ、合計 10 のグループ各 50 名、
合計 500 名の有効回収数を得た
《詳細は 分析データ（次世代高齢者調査）の概要 参照》



■ 次世代高齢者研究報告書 < PHASE 1 >

① 「次世代高齢者調査」の分析

～生活実態、生活意識を総合的に分析～

② 生きがい、老後の生き方の座標軸という視点での研究

～現状の自己を 9 つのジャンルにおいて座標に置き、老後の生き方を
どう志向するかとの関係を見る～

③ 時層研究

～生きがい・楽しみの世代による違いを研究する～



■ 次世代高齢者研究報告書 < PHASE 2 >

④ 次世代高齢者層、高齢者層におけるインタビュー調査

～「グループインタビュー」の実施～

⑤ 有識者による研究結果へのコメント

～次世代高齢者研究全体を俯瞰して有識者からコメントを
いただきました～



■ 次世代高齢者研究報告書 < PHASE 3 > ※本報告書

⑥ 幸福感、生活満足に関する分析

～幸福感や生活満足に繋がる属性や意識とは何か～

⑦ 有識者インタビュー

～世代の異なる有識者の発言を紹介します（⑤は一部を抜粋したもの）～

研究体制

< PHASE3 > 2018 年度の研究体制

研究幹事	櫻井隆治（公益財団法人ハイライフ研究所 代表理事副理事長）
研究リーダー	藤原 豊（公益財団法人ハイライフ研究所 執行理事専務理事）
研究メンバー	杉本浩二（公益財団法人ハイライフ研究所 上席研究員） 谷口明美（公益財団法人ハイライフ研究所 研究員）
研究協力	森 義博（一財実務教育研究所認定 データ解析士）

第2部

幸福感、生活満足に関する分析

～幸福感や生活満足に繋がる属性や意識とは何か～

1. 過去の分析のポイント

PHASE 1においては、次世代高齢者層、高齢者層の現在置かれている状況から老後（今後）に関する意識を調べるということで、その相関関係を中心に分析を行った。詳細は PHASE 1 をご覧いただくとして、結果を簡単に整理したい。（図表 3、図表 4 参照）

今後の見通しも含む現状についての意識を起点として、老後意識（老後の生き方）との相関関係をみた。現状の意識は図表 3 の表頭の 1～9 にある 9 つのジャンルを設定した。また、老後の意識については、45 項目の選択肢を設定し、主成分分析を行った（図表の表側に記した因子が分析結果である）。

※表の見方→表頭の 1 は「仕事」である。仕事のスコアが高い人（満足度や達成度の高い人）は、老後の生き方因子の 8 「生涯仕事を続ける」という生き方と相関が高いということである。

「仕事」については、高齢者層においては「生涯続ける」という因子との相関が高く、次世代高齢者層においては「高齢者として貢献したい」という因子と相関が高く、社会貢献的な意味合いを仕事に求めているという姿が映し出されている。今後の自分自身の存在を方向付けるといった意識がありそうだ。

高齢者層においては「趣味」や「学び」と強い相関を示す因子はなく、次世代高齢者層は「趣味」や「学び」は「新たな生活、変化への挑戦」という因子との相関が高く、これから取り組むべきもの、時間を割くべきこととして意識されているという特徴がみられた。

人間関係（「配偶者」「家族」「友人」）は、高齢者層、次世代高齢者層ともに、交流や楽しむといった因子との相関がみられ、現状において、良好な関係を築けていれば、それを意識して老後を生きていくという道筋は既に 50 代からみられる普遍的なものである。

「健康」「経済」はすべての基盤であるらしく、高齢者層で「健康」に関して相関の高い因子（「自由にのんびり楽しむ」）がみられるが、他の因子との高い相関はみられなかった。

最後に「社会」とは、自己肯定感を中心とした社会的に自己が受け入れられるという意識を示しているが、これは高齢者層においては交流や出会いを楽しむという因子と相関が高く、次世代高齢者層においては、「友人関係を大事に生きる」という因子との相関が高い。自己肯定感が高ければ、社会と積極的に交わる傾向があり、次世代高齢者層においては友人関係、高齢者層においては友人関係（仲間）のみならず、新たな出会いといった次元にまで広がりを見せるようだ。

以上のように、老後の生き方に対する意識の次世代高齢者層、高齢者層の比較において、いくつかの相違点や共通点が存在する。年齢的な影響と過去経験による世代的特徴などが影響していることは間違いない。

総合的に考察すると、人間関係は既に次世代高齢者層、つまり 50 歳を超えて将来的な展望もみえてきているようで、高齢者層になっても同様な意識が継続する。捉え方に違いがみられるのは「仕事」「学び」「趣味」といったことで、「仕事」を高齢者は生きがいの評価をする一方で次世代高齢者層は自己の社会貢献の可能性としてみる見方が強い。「学び」「趣味」においては次世代高齢者層にとって、恐らく仕事を離れ、もしくは比率を下げながら、新たな生活変化の為の要因としてみている。最後に、「経済」「健康」が重要であることは間違いないが、老後の生き方を方向付ける要因としてはあまり機能しない。

図表3 9つのジャンルと因子間の相関 《高齢者層》

66-75歳 n=200	1.仕事	2.学び	3.趣味	4.配偶者	5.家族	6.友人	7.健康	8.経済	9.社会
因子1_NEWシニアスタイルの模索	0.10	0.24	-0.02	0.11	0.12	0.11	0.09	0.19	0.01
因子2_仲間との交流を楽しむ	0.27	0.06	0.11	0.09	0.32	0.55	0.29	0.22	0.46
因子3_夫婦・家族との楽しい暮らし	-0.03	0.01	0.05	0.50	0.16	0.05	0.22	0.23	0.04
因子4_楽しみな計画や時間と期待	0.01	0.18	0.27	0.04	0.25	0.23	0.13	0.09	0.15
因子5_自由にのんびり楽しむ	-0.04	0.07	0.14	0.15	0.23	0.15	0.32	0.18	0.10
因子6_周囲の期待に応えたい	0.29	0.01	0.06	0.09	0.20	0.08	0.08	0.08	0.23
因子7_爽りある時間への挑戦	0.12	0.22	0.06	0.12	0.17	0.24	0.20	0.17	0.07
因子8_生涯仕事を続ける	0.41	-0.02	-0.02	-0.15	0.06	0.00	0.09	-0.05	0.02
因子9_迷惑を掛けず自立して生きる	0.04	0.14	0.14	-0.12	0.07	0.17	0.11	0.17	0.13
因子10_新たな出会いを楽しむ	-0.01	0.06	0.20	0.21	0.16	0.14	0.16	0.05	0.30
因子11_夢を追い、自己実現する	-0.07	0.28	0.27	0.07	0.17	0.11	-0.03	0.09	-0.01
	相関0.3以上			0.4以上		赤文字			

図表4 9つのジャンルと因子間の相関 《次世代高齢者層》

51-60歳 n=200	1.仕事	2.学び	3.趣味	4.配偶者	5.家族	6.友人	7.健康	8.経済	9.社会
因子1_新たな生活、変化への挑戦	0.29	0.35	0.30	-0.02	0.10	0.04	0.13	0.02	0.27
因子2_友人関係を大事に生きる	0.20	0.15	0.24	0.07	0.32	0.59	0.11	0.15	0.35
因子3_高齢者として貢献したい	0.38	0.20	0.04	0.11	0.13	0.20	0.16	0.21	0.20
因子4_老後は迷惑を掛けない	0.11	0.07	0.16	0.17	0.08	0.07	0.17	0.28	0.04
因子5_夢を追い、自己実現する	0.18	0.22	0.25	0.16	0.13	0.17	0.03	0.08	0.21
因子6_健康的で交流のある暮らし	0.01	-0.01	-0.02	0.07	0.07	0.18	0.12	0.10	0.07
因子7_夫婦・家族との楽しい暮らし	0.03	0.13	0.05	0.56	0.38	0.01	0.12	0.16	0.07
因子8_生涯仕事を続ける	0.25	0.08	0.10	0.02	-0.04	0.11	0.08	-0.01	0.09
因子9_自由にのんびり楽しむ	0.02	0.14	0.06	-0.01	0.10	0.08	0.16	0.06	0.01
因子10_時間があるだろうから頑張る	-0.03	0.12	0.05	0.09	0.09	0.04	0.09	0.08	0.22
	相関0.3以上			0.4以上		赤文字			

2. 本研究の視点について

先述のように、次世代高齢者層、高齢者層の現在置かれている状況から老後（今後）に関する意識を調べたが、では幸せや生活満足に繋がる要素、要因は何であるのかという問いについては、明確に示していない。

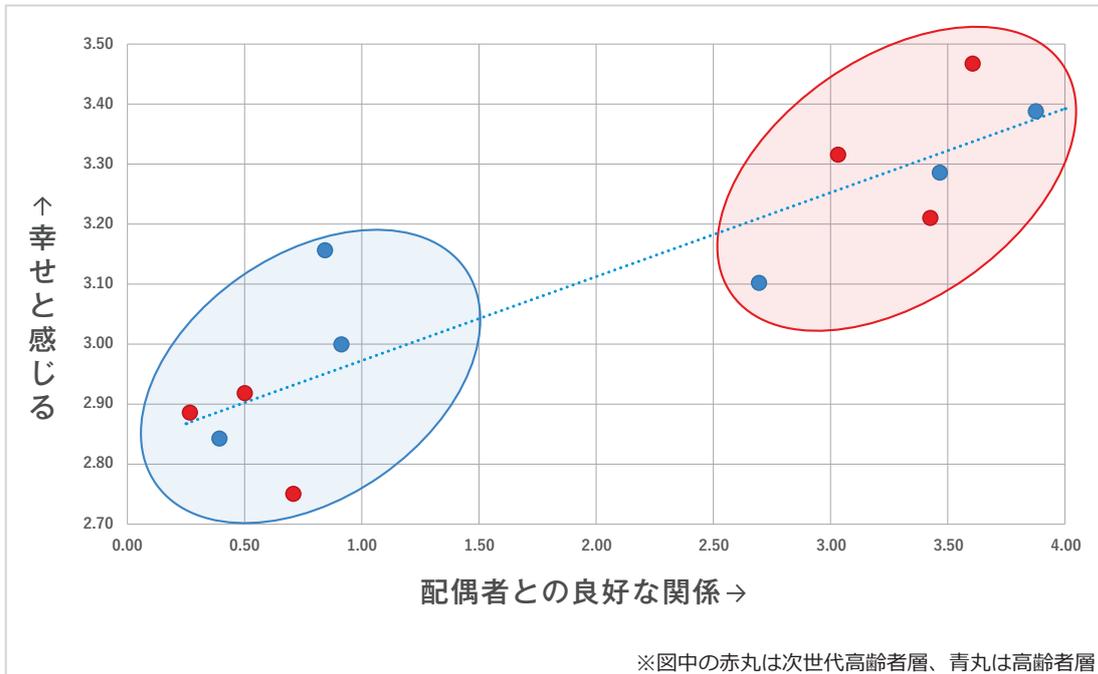
第30回ハイライフセミナー「超高齢社会の生き方のヒント」において、夫婦関係が良好であることが、幸福感との相関が高いということを説明するに留まっている。（図表5参照）

そこで、幸福感や生活満足の高い人はどういった属性や意識がある人なのかを、決定木分析を用いて明らかにし、考察することとする。

参考：決定木分析（CHAID）

決定木分析は、例えば幸福感の高低を最もよく分類できる属性変数を探し、その分類された中で最もよく分類できる属性変数を探すということを繰り返します。今回（CHAID）の場合は、カイ二乗検定を行い、有意（有意水準値が0.05）でなければ差異はないと判断するので、それ以上分岐（分類）はしません。その結果、幸福感を決定する（有意な差異が認められる）属性を導き出すということになります。

図表5 幸福感と配偶者との関係の相関





3. 分析データ（次世代高齢者調査）の概要

■調査対象：

分析対象者（合計 400 名）の基本属性を図表 6 に示した。51 歳から 60 歳（次世代高齢者層）200 名、66 歳から 75 歳（団塊の世代を含む高齢者層）200 名の 2 つに分けて示すこととする。性別は各々、男女半々（100 名ずつ）となるように調査設計して回収を行った。

配偶者に関しては、次世代高齢者層の内 92.0%が「配偶者がいる」と答え、離別や死別が 7.0%、未婚者が 1.0%である。一方、高齢者層は 82.0%が「配偶者がいる」と回答し、離別・死別が 17.0%と増加する。同居家族数は、次世代高齢者層が 4 人家族の世帯が 38.5%と最も多く、高齢者層においては 2 人家族世帯が 43.5%と最も多い。最終学歴においては、次世代高齢者層、高齢者層ともに高校卒が 40%前後と最も多く、それに 4 年生大学・大学院卒が続いている。中学卒は高齢者層が多く、次世代高齢者においては専門学校や短大卒が多く、4 年生大学・大学院卒と殆ど変わらない。

ついで、就業状況に関しては、次世代高齢者層は全体の 87.5%が就業している状態にある。その一方で、高齢者層は 41.5%が就業していると回答している。

図表 6 対象者の基本属性

(%)

属性項目		比率	
		51 歳～ 60 歳 (200 名)	66 歳～ 75 歳 (200 名)
性別	男性	50.0	50.0
	女性	50.0	50.0
配偶者	配偶者がいる	92.0	82.0
	独身（離別・死別）	7.0	17.0
	独身（未婚）	1.0	1.0
同居家族人数	1 人（単身）	3.0	10.5
	2 人	16.5	43.5
	3 人	24.5	21.0
	4 人	38.5	9.5
	5 人以上	17.5	15.5
最終学歴	中学卒	2.5	12.0
	高校卒	36.0	40.5
	専門学校・短大等*1	30.5	19.5
	4 年生大学・大学院	31.0	28.0
就業状況 収入を伴う仕事	就業している*2	87.5	41.5
	就業していない	12.5	58.5

*1 「専門学校・短大等」は専修学校・高専を含む

*2 「就業している」は収入を伴う仕事への従事とし、就業形態は「正規社員、パート・アルバイト、役員・経営者・個人事業主」とした。

- 調査対象：東京 30 km圏在住の満 51 歳～ 75 歳の一般男女
- 標本数（有効回収数）：500 人 ※ 61 歳～ 65 歳も含む
- 標本抽出法：エリアサンプリング法
- 調査方法：留置法（訪問して調査票配布 → 対象者記入 → 訪問回収）
- 調査時期：2016 年 10 月 28 日（金）～ 11 月 14 日（月）
- 調査機関：(株)行動科学研究所
- 調査対象カテゴリー（主なもの）：
 - (1)生活全般：生活満足度、幸福感、生活分野別満足度と不安度、ファッション志向、食志向、調理頻度、酒に対する意識と態度
 - (2)仕事：今後、収入を伴う仕事をしたいか、
 - (3)家族家庭：同居・近居の状況と理由、配偶者を頼りにしているか、配偶者から頼られているか、夫婦共通の趣味や楽しみ、夫婦共通の友人、夫婦間の会話、家族の悩みや心配事
 - (4)人付き合い：友人の種類、友人の人数、大切な友人、異性の友人、人付き合いで心掛けていること、ボランティアや地域活動への参加実態、
 - (5)楽しみ：楽しみを感じて行なっていること、最も大事にしたい楽しみ
 - (6)健康：現在の健康状態、健康面において自分にあてはまる状態
 - (7)情報：日頃よく見聞きする情報メディアの種類、ネットの SNS での情報発信の有無・頻度
 - (8)老後：「老後」に関する意識、「老後」に関する現状と今後の見通し
 - (9)家計状況：世帯収入（満足度）、支出（収支バランス）、世帯保有資産

4. 分析結果

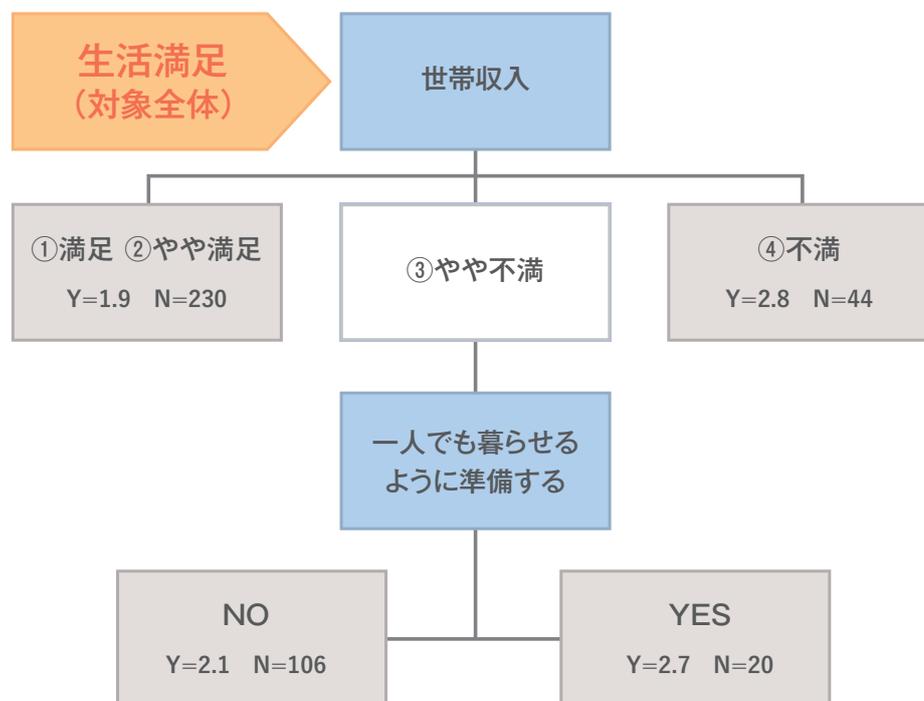
決定木分析の結果を紹介する形で説明することとする。

決定木分析においては、サンプル数が多い方が望ましく、最初に次世代高齢者層と高齢者層の合計、400名を対象に分析を行っている。両者の違いを見る以上に、生活満足度や幸福感の高い人の属性ということで考察を行っている。

結果①何よりも「世帯収入の満足」が重要

- 生活満足度の高い人の特徴は、全てにおいて世帯収入などの経済、家計面の要因が第1階層や上位の階層を占めることとなる。実態として、経済面の充足が生活満足と結びついていることは紛れもない事実である。
 - 調査対象全体を次世代高齢者層と高齢者層に分けても、同様に幸福度の高い人に関しても、全て経済、家計的な項目が上位を占め、階層形成がそこで収束してしまうといった結果であった。
- ※この後の②以降の分析においては、経済、家計に関する質問を除外して分析を行うこととした。

図表7 決定木①



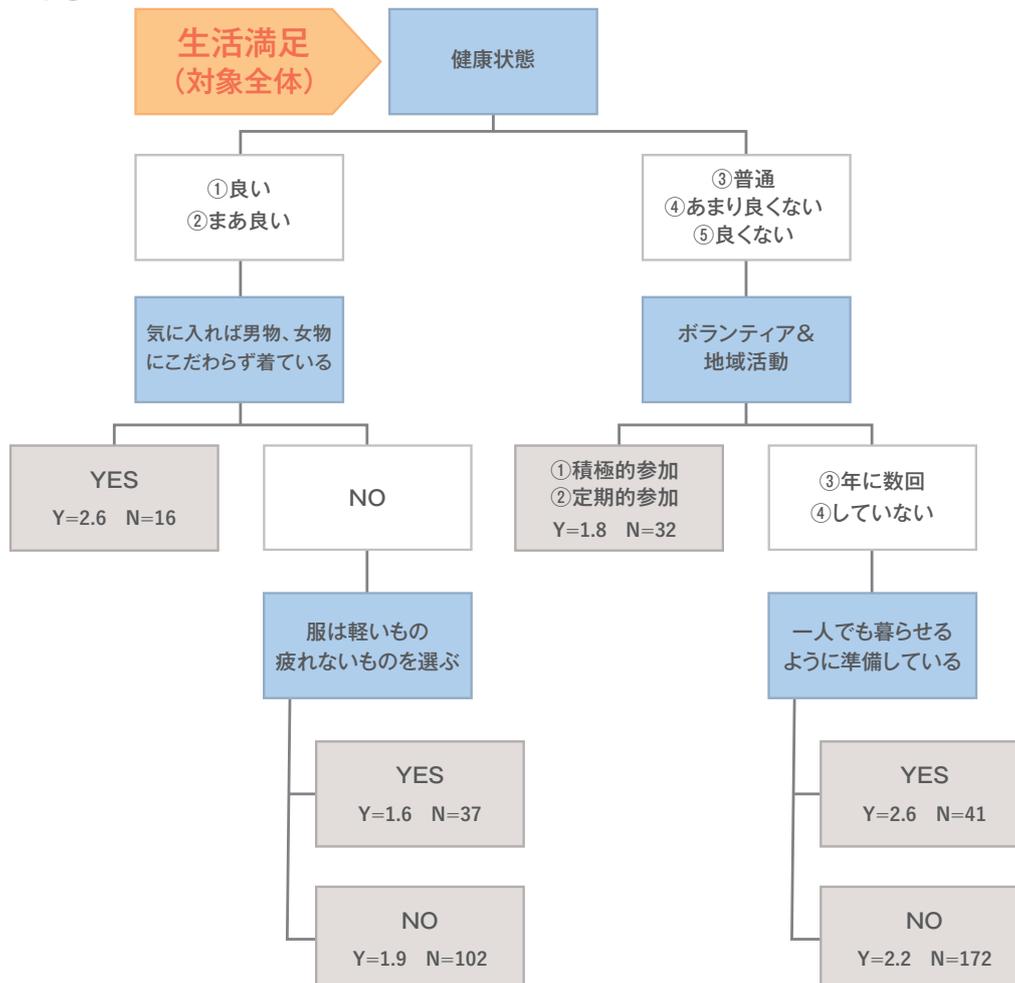
《図の説明と解釈》

- 第1階層は世帯収入で分岐し、満足グループ(①と②)と不満グループ(④)はここで収束する。つまり、これ以上の有意な分岐する要因がないということである。図中の「 $Y=1.9$ 」とあるのは、生活満足度を4段階で測定しており、【①満足=1、②やや満足=2、③やや不満=3、④不満=4】のグループ内の平均点を示しており、全員が「①満足」であれば、平均点が1となる。つまり、数値が低い方が「生活満足度が高い」といえる。満足グループの1.9に対し、不満グループは2.8と生活満足度は低い。また、図中に「 $N=230$ 」とあるのは、このグループに属する人数である【この後も数字の見方は同じ】
- 「③やや不満」を選択している人は更に分岐をしており、第2階層として「一人でも暮らせるように準備する」に対する回答(この場合は選択肢はYES/NO)によって分けられる。YESを選択するグループの方が生活満足度は低い、つまりそのような必要性を意識する状況にあることが生活満足度の低下に繋がっている。

結果②健康状態は重要であるがそれだけではない

- 生活満足度は健康状態（第1階層）によって、良いグループ（①と②）と普通以下のグループ（③④⑤）に分岐する。そしてさらに、第2階層、第3階層と価値観や生活スタイルによる差が感じられる。
- 健康状態が良いグループは、「気に入れば男物、女物にこだわらず着ている」（第2階層）で分岐する。YESと回答するグループの生活満足度は低く、つまり、ファッションへの関心が低下し、外見を気にしなくなることが生活満足度を下げているようだ。
- 更に、NOを選んだグループは「服は軽いもの、疲れないものを選ぶ」（第3階層）で分岐する。ここでもファッションへのこだわりが問われ、YESを選ぶグループは生活満足度が高い。つまり、外見を意識し、機能にもこだわりを持つグループが生活満足度が高いということである。
- 健康状態が普通以下のグループは、第2階層で「ボランティア&地域活動（への参加）」によって分岐し、参加グループ（①と②）は生活満足度が2番目に高く、健康状態が普通以下であっても外部との交わりがあることで生活満足度が高いことが分かる。
- 一方、参加しないグループ（③と④）は更に「一人でも暮らせるように準備している」（第3階層）で分岐し、YESと回答しているグループの生活満足度は低い。
- 健康状態から分岐がスタートしたが、ファッションを通じて外部を意識することやボランティアなどの行動といった外的な交流による生活満足度への影響といったものが確認された。

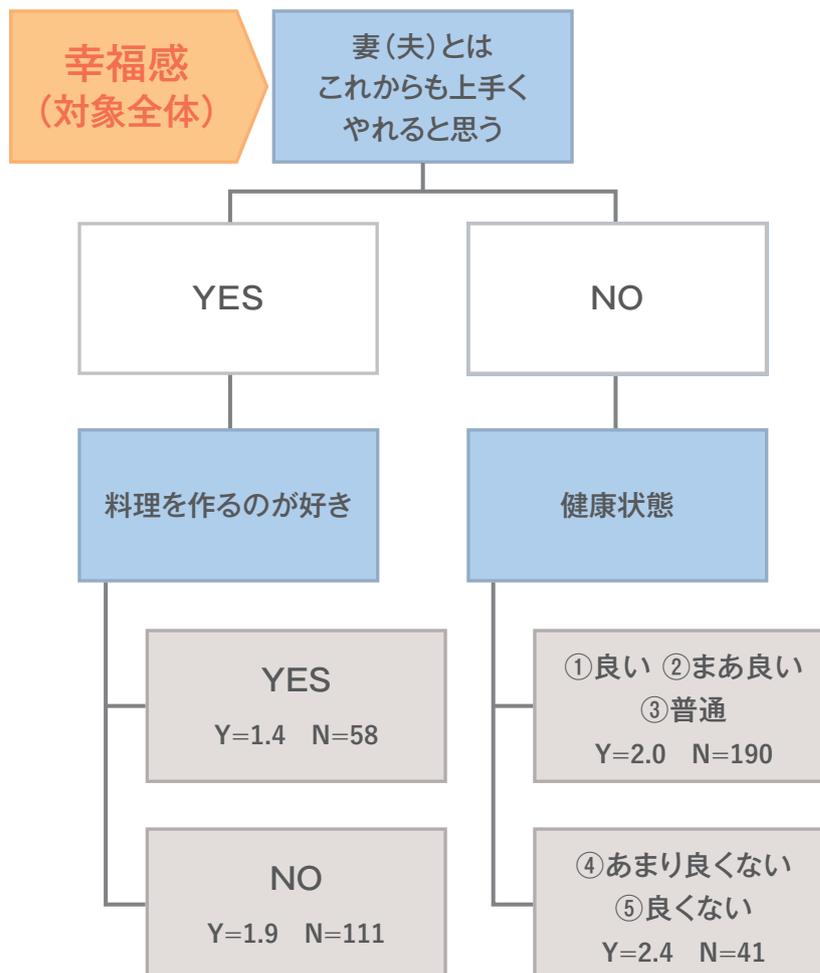
図表8 決定木②



結果③ 幸福感は配偶者との関係から始まる

- 生活満足度が現在の満足指標とするならば、幸福感はより将来的な視点である。
- 第1階層は「妻（夫）とはこれからも上手くやれると思う」で分岐している。最も身近な存在である配偶者との良好な関係が重要となっている。
- YES を選択したグループは、第2階層「料理を作るのが好き」で分岐する。ここで YES を選択したグループの幸福感は 1.4 と最も高いスコアを示している。第1階層で「これからも上手くやれる」という意識のもと、「料理を作る」という日常的な行動も好きということで幸福感の高さが実感できる。料理を作ることが好きではなくてもグループとしての幸福感は2番目に高い。いかに第1階層の「妻（夫）とはこれからも上手くやれると思う」が重要なことであるか、興味深い。
- 「妻（夫）とはこれからも上手くやれると思う」において、NO を選択するグループの次の分岐は「健康状態」である。配偶者との関係に期待できない上は、自らの健康が重要であり、健康グループ（①②③）は全体の約半数（N=190）と多数派である。健康ではないグループの幸福感は低く、老後への不安が感じられる。

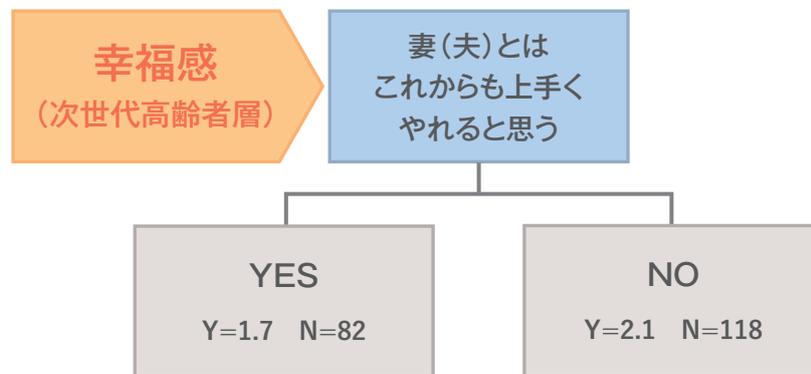
図表9 決定木③



結果④次世代高齢者層における分岐

- 次世代高齢者層では、第1階層の分岐のみである。
- 「妻(夫)とはこれからも上手くやれると思う」でYESは82名、NOが118名となっている。配偶者との関係の重要性については、20代や30代と異なり、50代においては老後のあり方、この先が見えてきている、方向付けられているという結果が示されている。もちろん、実態として全く変化がないということではなく、YESからNO、NOからYESへの変化は起こりうると思われるが。
- 第2、第3と階層が増えないのは、有意な差を示すものがないということだが、50代というこれから様々な変化に晒される年代にとって、幸福感を分類するような項目、決定づけるようなものがまだ定まっていないということなのだろう。

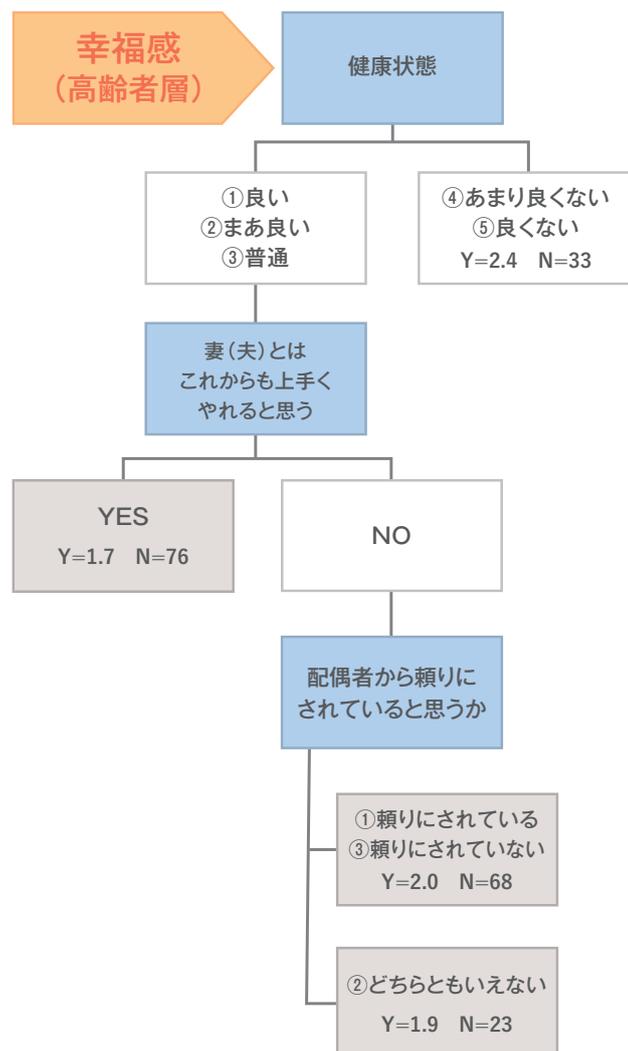
図表 10 決定木④



結果⑤高齢者層における幸福感の分岐

- 第1分岐は「健康状態」である。健康状態が良くないグループ（④と⑤）は、幸福感も低く、ここで収束している。つまり、健康でないことの意味が高齢者ということで、より切実であるということである。
- 一方、健康状態が普通以上のグループ（①②③）においては、第2階層として「妻（夫）とはこれからも上手くやれると思う」が登場する。配偶者と上手くやれる人の幸福感は高く、健康で夫婦関係が良好ということが重要であるということが分かる。ある意味、配偶者との関係や健康状態は日常的なことであり、趣味や友人といったことが挙がってこないということは興味深い。
- 「妻（夫）とはこれからも上手くやれると思う」でNOを選択したグループは、第3階層として「配偶者から頼りにされていると思うか」によって分岐する。興味深いのは、配偶者と上手くやれないと思っている人は「①頼りにされている」「③頼りにされていない」が同一グループで幸福感が低い。つまり、上手くやれない相手から頼りにされても困るし、頼りにされていないから上手くやれないといった関係がありそうだ。結果的に「②どちらともいえない」というグループの幸福感が高い。

図表 11 決定木⑤



5. 分析のまとめ

以下に決定木分析の結果をベースに考察を行いたいと思う。

経済面の満足が第1階層となる

生活満足や幸福感において、世帯収入への満足が第1階層となり、それに類する資産や年金など、結果的に家計に困らないといったことの重要性が確認できた。この結果は当然と言えるものかもしれない。お金で困ると回答する人が生活満足や幸福感が高いとは考えにくいことは事実である。

ここでそのグループの該当者について詳しく考察してみたい。まず、決定木分析①によると、第1階層で世帯収入に関して「①満足」「②やや満足」が、満足グループとして分岐しているが、ここには全体の6割弱の230名が入る。次に「③やや不満」を選択したグループは第2階層で「一人でも暮らせるように準備する」で分岐し、NOつまり準備しない（する必要を今のところ感じていない）グループは次に生活満足が高いグループであり、106名が属し、全体の3割弱が該当する。ここまでで全体の84%が含まれており、残り16%は世帯収入において「③やや不満」を選択し、第2階層で「一人でも暮らせるように準備する」にYESを選択した20名と第1階層で世帯収入に関して「④不満」を選択した44名で構成される。ここで考えられることとして、この16%のグループは比較的生活困窮度が高いグループであって、残り84%は当面は生活には困らないといったグループであると推察される。

調査の特性から、本当に生活に困っている人や健康状態が良くない人を対象に実施することは難しく、訪問して回答していただくといった手続きに答えられる人を対象としている。従って、日本人の50代以上の84%が生活に満足しているとは断定できないが、凡そ生活満足において問題がない人（満足 > 不満）が多数派と考えて問題ないと思われる。

世帯収入に「①満足」「②やや満足」で約6割、「③やや不満」も入れると84%の人が生活に満足しているという結果を更に掘り下げる必要がある。そこで、この後の分析においては、経済面の項目を除外して実施することとした。

健康の重要性の次にあるもの

決定木分析②によると、生活満足の高さは健康状態によって最初に分岐している。「①良い」「②まあ良い」の良好なグループ。「③普通」「④あまり良くない」「⑤良くない」が良好でないグループ。そしてともに第2、第3の階層で分岐した。

まず、良好なグループ。第2、第3ともにファッション（衣料）に関するものとなった。第2階層は「気に入れば男物、女物にこだわらず着ている」という項目である。これは例えば若い女性が男性ブランドのシャツを着こなすといったファッションセンスを感じるものではなく、外見を意識せずに過ごしているということに近い。要するに外見を意識するような環境にないと言っても良い。従ってYESの人は生活満足度が低い。更に第3階層において「服は軽いもの疲れないものを選ぶ」といった機能面のこだわり

に YES の人の生活満足は高い。外見への意識から機能面の期待など、対人関係への意識、活動的なスタイルが推察される。良好な健康状態であってもファッションに代表される他者意識と自分のスタイル追求といったことの重要性が指摘される。

また、良好ではないグループ（③普通も含んでいる）においては、第 2 階層で「ボランティア&地域活動（への参加状況）」において分岐している。まず、注目すべきは「①積極的参加」「②定期的参加」といった積極活動グループが、健康状態は良好と言える状況にないにしろ、周囲との交流が行われており、孤立状態にはないということである。そして、このグループは $Y=1.8$ と、生活満足は低くなく、2 番目に高い。これは少々持病とかがあっても周囲との繋がりがある人の生活満足は高いということである。その一方で「③年に数回」「④していない」を選択するグループ、消極活動グループは、更に第 3 階層で分岐する。「一人でも暮らせるように準備する」で YES と回答する準備しているグループの生活満足は低く、NO と回答する準備していないグループは少し生活満足が高い。

全体でみると、そもそも健康状態良好の活動的なスタイルグループ ($Y=1.6$, $N=37$)、あまり良好ではないが積極活動グループ ($Y=1.8$, $N=32$) が生活満足の高い 2 つのグループであるが、両グループを足しても 2 割に達していない。最もボリュームが大きいのは、健康状態があまり良好ではなく、ボランティア&地域活動に消極的で、「一人でも暮らせるように準備する」というところまでは状況的に至ってない、つまり配偶者や家族への依存ができるか、考えないようにしているというグループである ($Y=2.2$, $N=172$)。半数近い人がここに属している。

昨今、高齢者の孤独、孤立は社会問題として扱われる傾向にある。高齢の単身世帯の増加によって、孤独死といったことをマスコミを通じて見聞きする。また、周囲や社会との関係における孤独、孤立を指摘するものも多い。〈参考：藤森克彦著「単身急増社会の希望」(日本経済新聞出版社／2017 年)、岡本純子著「世界一孤独な日本のオジサン」(角川新書／2018 年)〉

経済面（家計）、健康面が重要であることは間違いないが、孤独、孤立といった面からの生活満足に与える影響は無視できない状況にある。

幸福感を支える配偶者との関係

幸福感に関して、決定木分析③では全体（400 名）、決定木分析④では次世代高齢者層に絞り、決定木分析⑤では高齢者層に絞った。共通して言えることは、「妻（夫）とはこれから上手くやれると思う」という分岐が登場するということである。

次世代高齢者層においては、分岐はこれだけである。つまり、他の項目においては幸福感との結びつきを決定しうる(有意な差が生じる)レベルにないということである。配偶者との関係の重要性が確認される。50 代を人生の折り返し点を超えているとするならば、より良きパートナーの存在がいかに重要であるか、友人や趣味といったことでは代替できるものではないのかもしれない。

全体（400 名）を対象としたものでみると、最初に「妻（夫）とはこれから上手くやれると思う」で分岐し、YES を選択すると第 2 階層は「料理を作るのが好き」となる。配偶者との関係が良く、かつ「料

理を作るのが好き」であると楽しそうな家庭の食卓が想像できる。非日常ではなく、毎日のことであるということがより幸福感をイメージしやすい。但し、このグループが全体の約 15%と決して多くないということも認識する必要がある。

一方、「妻（夫）とはこれから上手くやれると思う」において NO を選択すると健康状態の良し悪しにおいて分岐する。当然、健康状態が良い方が幸福感は高い。配偶者と上手くやれるかどうか自信がなく、現在健康上問題ないというグループが最大ボリュームであり、全体の半数に近い（N=190）。

高齢者層の幸福感はある意味明解である。最初に健康状態で分岐し、「④あまり良くない」「⑤良くない」のグループはここで収束し、幸福感は低い。より高齢になることで、健康が損なわれると深刻な状況に繋がることが分かる。

健康状態に関して「①良い」「②まあ良い」「③普通」を選択するグループの次の分岐が「妻（夫）とはこれから上手くやれると思う」である。YES を選択すると収束し、健康かつ夫婦関係の良さが幸福感に繋がっていることが分かりやすい。NO である場合、更に分岐し「配偶者から頼りにされていると思うか」という項目で別れる。第 2 階層で配偶者と上手くやれないという判断があり、その上で「①頼りにされている」「②頼りにされていない」という選択は、配偶者のことが負担感に繋がったり、失望感に繋がったりといったことがあるようで、「③どちらともいえない」を選択する、つまり曖昧な方が幸福感が高いという皮肉な関係が伺える。

分析結果を総合的にみて

繰り返しとなるが、経済面、健康面といった生活を送る上での基本的な条件の重要性は調査結果からも明らかであり、上位の分岐として現れる。ただ、調査の特性から世帯収入や健康状態に関して深刻な状態である人は含まれていない。

その上で分析をすすめると、配偶者との関係性が最重要であり、次に外部との関係性といった結果であった。経済面はさておき、健康面や配偶者との関係（やがて一人になる可能性が高い）は永遠に良好ということは考え難く、既に述べたように孤独、孤立といったことのケアが課題とされることは必然である。

残念ながら友人関係や趣味などは生活満足や幸福感において分岐する要因ではなかったが、社会とのつながりや一人の時間の充実といった視点が今後益々重要になるのではないかと考える。

第3部

有識者インタビュー

1. 有識者インタビューのこだわり

「次世代高齢者研究」を進めるに当たって、当初より決まっていたこととして、有識者へのインタビューがありました。特にこだわっていたのは、超高齢社会について個人的かつ社会的な視点をお持ちである方、例えば研究対象とされている方、といったことです。そして、4名の方に PHASE 1 の報告書をご覧いただき、率直な印象や感想をお聞きしました。

また、研究に関するコメントとともに、個人的な様々な出来事や思い、そして超高齢社会をどう捉え、何をテーマに取り組むかなどについても、幅広く伺いました。

皆さんから、興味深いお話をお聞きすることができました。あらためて御礼申し上げます。

2. 取材させていただいた方のプロフィール

取材させていただく方に関しては、出来る限りジャンルの異なる方をお願いしました。また、世代的にも団塊の世代から団塊ジュニアの方まで、重ならないようにしました。

インタビューさせていただいた4名の方の世代、並びにご専門やお仕事の領域は以下の通りです。

- ① 団塊の世代 文筆家 元商品開発研究所長 農業活動中
- ② 60代前半 音楽プロデューサー 現在音楽活動中
- ③ 50代後半 心理学・ライフキャリア（大学教授）
- ④ 団塊ジュニア 精神科医師（大学教授）

《インタビューにご協力いただいた皆さん》

◆池田 敏秀 氏

1948年、千葉県出身
（株）肌箋舎代表 元資生堂執行役員・商品開発部長
国際協力 NGO である IV-JAPAN（ラオスの職業支援など）の副代表理事
千葉県で現在も農業継続中／化粧品業界紙の「日本商業新聞」での毎週のコラムの連載も継続中

◆岡田 信一 氏

1955年、大阪府出身
音楽プロデューサー、ミュージシャン、元ヤマハミュージックエンタテイメント エピキュラス所属
ポップコン、世界歌謡祭等の音楽イベントや多数のコンサート制作、日経おとなのバンド大賞等のイベント制作を手がける／ラジオ NIKKEI「大人のラヂオ」のパーソナリティー

◆川崎 友嗣 氏

1960年、東京都出身
関西大学 社会学部長 社会学研究科長 社会学部教授
元日本労働研究機構研究員（キャリアガイダンス研究担当 91年～97年）
日本キャリアデザイン学会（元常務理事 12年～16年）

◆成本 迅 氏

1971年、奈良県出身
京都府立医科大学大学院教授
日本精神神経学会・日本老年精神医学会専門医・指導医
日本生物学的精神医学会・日本神経精神医学会・日本老年精神医学会 各評議員
日本老年行動科学会 理事
専門は老年精神医学。行政、医師会、介護関係者等と共に京都認知症総合対策推進計画（新・京都式オレンジプラン）の策定を実施



池田 敏秀

1948年、千葉県出身
(株)肌箋舎代表 元資生堂執行役員・商品開発部長
国際協力NGOであるIV-JAPAN(ラオスの職業支援など)の副代表理事

千葉県で現在も農業継続中／化粧品業界紙の「日本商業新聞」での毎週のコラムの連載も継続中

最初に普段どういう活動をされていらっしゃるのかをお話いただけますでしょうか。ビジネスのお話だけでなく結構なのですが。

正直言って、高齢者に対して何かやっているかというところは何もやっていません。シニア向けの化粧品を作るぐらいのことしかビジネス的にはやっていないですね。

ラオスでの活動のこととか。それと僕が興味を持っているのは農業です。

本当は資生堂を59歳で辞めたときに、それまで本も書いていたこともあった。またその本のテイストもどちらかと言ったら昭和のノスタルジーっぽいのがあって、昭和の良さみたいなものを伝えたいなと思っていて。その考え方と合致するような生き方をこの4年間してきたような気はするのです。

1つはラオスのボランティアをもう既に18年続けている。それは別にシニアじゃないんだけど、むしろ若者の支援なんだけれど、背景にあるラオスという仏教の国が年寄りを敬ったり、家族を大切にしたりという昔の日本の良き時代を彷彿させるようなところがあるので、そのへんを逆に勉強させてもらおうという気持ちもあった。それでラオスをやってきたのです。

それから、日本商業新聞にずっとコラムを書いてきて、そこでも日本の高齢化の話とかを断片的に書いて

きたのだけれど、私が思っているのは、日本はやはり高齢者に優しく若者に冷たい世界だなという気がずっとしている。それこそ植物や動物の世界だったら老人は駆逐されていくのに、人間の社会だけは駆逐されずにのうのうと生きているというのが、何か既得権とか、分配の問題でも年寄りのほうが優遇されているかなという気がして…、かと言って姥捨山を礼賛するわけではないのですけれど、そのへんを皮肉っぽくいつも書いているのです。

『研究』と言っても、電車の中で初老の男性が切れるところを見たり、何でこんなになってしまうんだといったような年寄りを見て腹を立てたりするぐらいのことしかないのですが…。

商業新聞はいつ頃から書かれているんですか。

資生堂を辞めた瞬間から。編集長の南浦さんと親しくて、実はそこで恩を売れば店を紹介してくれると思ったからやったんだけど(笑)。実際には1軒も紹介してくれない。あれは結局原稿料ももらってなくて、ずっと年間も。時々神戸牛を送ってきますけれども、それで騙されてやっているんですけど(笑)。でも自分もストレス発散の場にはなっているというか。自分の思ったことをまとめて、文章的に気に入ったりするといいい気持ちになったりするというのが若干

あるんですけど。だから苦痛でも何でもないし、何編かたまったら製本して、買ってもらったりする。そこでいろんな手練手管を労して買ってもらうのも結構面白い仕事で。結局「買ってね」と言って、「分かった」という人間関係がどれだけできているのか、その段階で分かるじゃないですか、何にもなくて送りつけて買ってくれる人もいるし、結構それが楽しくて、今回なんか一斉配信なんかで出しても、やはり直ぐに分かったと言ってくる人とずっと無視する人というんだけど、そこで何となく人間関係が分かって、これからこういう人とはこう付き合おうと（笑）。

理系の池田さんが既にご本も出版されていらっしゃるし、書きものをするということは昔から興味があったのですか。

好きですよ。でも、今これの中に書いたけれど、高校1年生ぐらいのときに、稲田伊之助という人がいて、いつか話したことがありましたっけ。大平正芳さんの先生なんですけど、突然呼ばれて「市川税務署が高校生対象に納税の作文コンクールをやっているからお前書いてみないか」と言われて、それこそ一晩で書いたらグランプリを取ってしまって、そのときから「俺、作文うまいのかな」と誤解して、それから好きになりましたね。だから先生というのはある面で、そうやって動機付けすることも必要で、私の場合はそのときに。

で、まだ高度成長の前ですけど、高校生は一応理系を目指すというのがスタンダードで、落後者が文系に行くという時代だったので、だから自分は理系だったけれど、本質的に理系じゃないということは自覚していた。慶應の工学部は推薦入学なわけですから、もう文系に転向していたのに、慶應の工学部が推薦を募集していて、「あっ、やっぱり僕は理工系だ」と言って行ったのですから。でも、自分でもびっくりしたのは、そうやって自分で向いていなくて工学部に入っても、卒業するのに苦労しなかった。それで成績も悪くない。

大学院も行ってらっしゃいますよね。

大学院は4年で就職のタイミングを逃したから行っ

たので。

そんな簡単には入れないでしょう。

大学院は行けますよ。大学院は学部のとときに所定の成績があればほとんど行けました。だから、慶應の工学部ぐらいだったらちょこちょこっとできちゃったという感じがした。どっちにしても、本質的には文系なんでしょうね。だってラジオ一つ、パソコン一つ直せない。

いやいや、ラジオ、パソコン系はやっていらっしやらないだけで。

さて、ボランティアのいきさつはご説明いただきましたけれど、元々ご実家が農家でいらっしやるのですね。

そうです。千葉の。今も田んぼも畑もやっています。それも惰性ですよ。本当はやめたいですね、田んぼなんか。だって買ったほうが安いし、この労力を考えたら絶対やめたほうが特なんですけれど、田んぼが荒れるのを見るのが嫌なんですよね。先祖代々で先祖に悪いとか、そんな気持ちはさらさらないですよ。結局田んぼに草が生えてきて、それが嫌でしょうがなくやっているという感じです。

自分の家から地続きになっている所があるのですが、そこだけ自分がやって、あと遠くのほうの田んぼは人に任せてしまっているのです。もう下は大体10軒ぐらいの田んぼがあったのですが、今やっているのはうちだけなんです。残り9軒はみんな休耕です。休耕にしちゃったからハクビシンは棲むわ、タヌキは棲むわ、キジは棲むわです。すぐ脇には畑が少しあるのですが、そこで何を作っても100%奴らに食われちゃうから。そうすると、食われちゃうから作らない、そうすると荒れるというパターン、この負のスパイラルがずっとあって、農業は本当に周りと一緒に農業をやっていなかったらできないです。自分だけじゃできないですよ。水の問題もあるし、雑草の問題もあるし。結局農業というのは昔風の、今日は自分ちをやったけれど、明日はあそこのうちに行って手伝うとかいう、そういう人海戦術でやっていた農業が一番いい農業な

気がするけれど。

全然テーマと関係ない。高齢者に結び付くことを考えようと思っているんだけど。

親父が死んだときに、デイサービスに行くと本当にみんなつらい顔をして、早く帰りたいという顔をしているわけです。本当は介護施設なんか行きたくないという顔をみんなしているわけです。本当だったらうちにいたい。で、うちにいると家族の迷惑になるから行かなきゃいけない。だから今の年寄りって本当にかわいそうで、しぶしぶ向こうに行っているわけですね。それで風呂だけ入れてもらって帰ってくるのですが、うちのおやじも帰りたくてしょうがなくて、行って、風呂入って、ご飯食べて帰ってくるのです。3時ぐらいに帰ってくるのですが、お風呂に入ると老人性乾皮症というやつで、乾いた後痒いんですよね。夜中も痒い。痒いんだったら油をやればいいと、油と植物系の保湿剤か何かを混ぜたオリジナルのオイル商品を作って、そこの介護施設にあげたわけです。そうしたらそこで、風呂に入れたら濡れている体のままその油を塗っていたら、結構夜中に痒くないと言うんです。だから、そういうのも商品化したらいんじゃないかなと思うんだけど、今うちの資本では、そういう思い付きの商品は作れませんから。でもそういう観察を基に、化粧品に生かしていけたらいいと思うんですけれど。

**農業もされているので、地元との関係性は強い
ですよね。普通のサラリーマンは、マンション
住まいだと、疎遠になることが多いじゃないで
すか。池田さんはちょっと違いますよね。**

ちょっと違うかもしれないですね。でも本当は都心にマンションを買って住みたいですけどね。さっき言った惰性というか、やはり向かないのかな。都会にいても、恐らく老化しちゃうでしょうね。結局体を動かしていたほうが健康ですよ。だから休んだりなんかすると、土日は野良仕事になってしまうわけです。田んぼに入ったり木の枝を切ったりしてやっているわけです。それが全部休養に充てちゃうと、月曜の朝なんかだるい。今でもそういう傾向はありますね。土日

に休んじゃうと月曜日調子が悪いですから。不思議なものです、貧乏性というやつでしょうか。

我々の研究は70歳前後である団塊の世代と戦中派ぐらいと、50代を比較しています。結果は、70歳前後の方がよりポジティブで、むしろ次世代高齢者と言っている50代の方が悩み多き年代という特徴があります。

そう思いましたよ。そうじゃないかなと思いますよね。やはり結構ここで言う次世代高齢者ですか、やっぱりこれから先、怖いでしょうね。団塊の世代でもそろそろしっぺ返しに来るんじゃないかという気持ちはあって、それより前の人はいいと思うのですが。他の人は、それこそ2030年くらいになったときに、介護施設はないだろうし、あっても働く人がいないだろうし。お金の問題じゃないですよ。いくらお金があってもいい家を造りたいと言っても、デザイナーがいいデザインを作ってくれたとしても、大工さんがいなかったら造れない。それと同じで介護なんかも、今の私たちよりもっと若い55歳~60歳くらいの人って、どうなるのかというのがあってしょうね。だから取り敢えず金だけは貯めておこうかという気持ちはあるでしょうけれど、相当怖いと思います。だから全部そのへんの差があると。

自分は昭和23年生まれだけれど、団塊の世代ってやはり主役意識があるんです。世の中というのは自分の世代を中心にずっと回ってきていると。子どものときは国を富ませないといけなから、いっぱい子どもを産んで育てて。そのころのベビーブームに生まれて、それに合わせて学校制度ができたり、この世代を育てると同時に街が豊かになっていったり家が整ったりしていく。高度成長の時代に勉強していて、時代が団塊の世代とともに生きているような気がするのです。自分が団塊世代だからそう感じているのかもしれないけれど、自分がそれほど不幸じゃなかったからそう思うだけの話かもしれないけれど。何かいい時代に生まれて、恐らく社会保険というか、自分の掛けた年金とか、自分よりも余計にもらえる最後の世代だと思

うのです。これからの人はもらえるかどうか分からない。かろうじて逃げ通せる世代、本当に恵まれた世代だと思う。そういう感覚があらゆる調査の中に反映されているような気がするんです。

だから、これから年寄りになる人たちって、俺たちが食い散らかした後の残渣(ごんさ)をもらうような、そんな気がするんです。この次世代の女性の高齢者の意識というのが面白いほど他と違うんです。これから段々こういう意識にみんなが収束していく気がするんですけれどね。

いろんなことで、50代が不安に苛まれているなというのがよく分かります。

何となく分かりますよ。例えば企業年金をやめるという話。企業年金ってあれほどおいしいものはないじゃないですか。生きている限りもらえるのだから。それをやめるということはどういうことかという、やはりグローバルスタンダードに近づいたということでしょうね。終身雇用の後の家族的に面倒を見てやろうという、そういう仕組みが崩壊していく。だから現役のときに頑張ればそれなりの報酬はあげるよと。でも辞めたらもう知らないよ。ということは、逆に企業の中で人が育つなんていうことは幻想だという話になるわけです。

ある仕事に対して誰かが応募してきて、合致してこの仕事をやろうと。そこでこの人がいくら成長したって、この仕事として契約しているんだからずっとこれをやりなさいと。もう少し高い仕事をしたかったらそれを辞めて、またトライしなさいよと。そこでまた契約が生じて高いお金をあげますよという。日本もそうなってくると、もう仕事を辞めた後は自己責任になってしまうということですよ。

日本の終身雇用制度のいい所というのは、そこまで面倒をみてくれていた。企業年金がないということになれば、やはり不安そのものですよ。

そういう企業がどんどん増えていますよね。

さて、冒頭おっしゃった団塊の世代が全部ステージをいろんな意味で変えてきたというのは、す

ごく感じています。故に期待するところも大きくて、何か変わってくれるといいなと思っています。

そうなんですよ。エッセーを書いているのですが、その中で共通しているのは、団塊の世代は自分で壊した世の中の仕組みを直してから死んでくれと。結局、恩恵に浴したの、それこそ財産を残して、それも自分のバカ息子、バカ娘に財産を残すんじゃなくて、自分の稼いだ金を国に還元してさっさと逝ってくれと。自己責任においてやってからこの世からおさらばすべきだということを結構書いているんです。

本当に団塊の世代は過剰に評価されていますよ。だってその前の世代だったら、いわゆるホワイトカラーとかブルーカラーとかありましたよね。でも団塊の世代のブルーカラーだって結構年収1,000万以上がざらにいたわけですよ。その前の世代はそうじゃないし、その後の世代は、今度はホワイトカラーでも1,000万にいかないわけですから。いろんな面でいい世代なんですよ。

その男性がリタイアされて、元気がなくなるといった現象も目立ちます。これは男女間の違いもあるのですが、サラリーマン生活を終えたときの落差というのが気になります。池田さんはその落差がないと思いますが。

私は確かにないです。でも男女差があるというのは、今の企業が男社会だったからでしょうね。これが男女同じくらいだったらこの差というのはないんじゃないでしょうか。やはり男は会社で世界を作ってきて、それなりの蓄財もあるし、それなりに人間関係もできちゃうし。そうするとそのまま引きずっていけばいいなと思っているのに対して、女性は家庭にいて、亭主が戻ってくるしかないのは嫌だなと思って。それは何となく分かりますよね。

調査でも、友達関係は、女性はやはりママ友が多いんですよ。地縁性ももちろんあると思いますし。男性ほど名刺の肩書き的なことはもちろんない。子どもを通じての知り合いって、言っ

てみれば鎧を着る必要がないじゃないですか。

もうバレてしまうから。そこでの付き合いがね。

うちの女房なんかもそうですよ。俺が相手をしないものですから、ヨガの教室なんかに行って、ヨガの教室の友達と遊びほうけていますよ。どんな友達がいるか知らないし、今日どこに行くかも知らないです。出かけてくると言われて、ああそうかという話でもう全然。でもそうなったのはここ10年くらいです。だから女房が50歳を過ぎてくらいから。

あらたに友達もできるということですね。

それまではあまり家からも出なかったし、俺が会社を辞めた時期と合うという訳でもないです。

私は、結構家と外では変わるんだな。江戸川を渡ると人間が変わると自分でも言っていますから（笑）。でも家族にサービスするとか、家族のためにどうのこうのってことはあまりしなかったんです。その代わり農業もちゃんとやるし、部屋の掃除もやるしということはあるって、それほど嫌がられる亭主ではないと思うけれど、積極的に家事をしようとかいうものもないのです。それほど嫌われることもないと思っていたのですが、最近は年がら年中嫌われているみたい（笑）。

池田さんは首都圏にずっといらっしゃるのです

よね。団塊の世代の方で地方から出てこられて、

そのままずっと東京とか。そのへんは何かお気づきのことはありますか。

俺たちの頃はそれこそ東京へ東京へというのがあったし、学校に行かない人は集団就職で来たりしていますよね。で、田舎に戻らずに東京にいるという人は結構いますよね。いるんだけど、そういう価値観で東京に来ているから田舎に戻りたいという人もあまりいないでしょうね。

同世代系の方はたくましく生きてるんじゃないかなという感じですか。

一人一人見ていくとそうでもなくて、頼りないのばかりなんだけれど。たくましいというのは、ある面で経済的な不安とかそういうものなしに皆さん裕福に生きているということかもしれないよね。だからメンタ

ルなところでは悩んでいるのかもしれないですけどね。私が思うに、団塊の世代ってあまり自殺しないんじゃないかと思って。大阪から来ているやつとかみんな今東京に住んでいますけれどね。それは集団就職で来た人もそうだけれど、東京でそれなりに仕事をして、郊外に家を持って、それが唯一のご褒美みたいなところもありますよね。それで自分の一生が良かったなと思うのかどうか分からないですけど。

昭和22年、23年、24年というのが団塊の世代ですね。これをもう少し下まで団塊の世代と言うのか分からないですけど、私は23年だけれど、団塊のど真ん中です。結構22と24は違いますから。見ていると分かります。都はるみや沢田研二は私と一緒になんです。武田鉄矢とかは1つ下なんです。何か違うんですよね。都はるみと沢田研二はメジャーなんです。質もいいんです。でも1つ下になってくると、何かちょっと違うんですよ。これはおごりですよ（笑）。

団塊の世代を一つの塊と認識していましたが、

1年で違うものですか。

違いますよ。実際に生きている連中から見ると違う。23年組はプライドがある。戦後3年も経ってから生まれたので、ある程度国も落ち着いてきたし、栄養状態も良くなってきたし、被災の程度も違う。もう1年たつと、もう少しいいものも食べ始めてきたし。そうそう。国も富み始めてきたし、というところがあって。22年はまだ貧乏だった。結構この3年間というのは実際に話をしてみてもなんとなく違うんです。体格がどうのとか、お金を持っている持っていないとかそういう話ではなくて、何か醸し出す雰囲気がちよつと違うんです。また自分礼賛になるけれど、23年はメジャーなんです。

面白いですね、誰も否定できない、肯定も逆

できないけれど。でもそうかもしれないですね。

その1年1年が戦後において、大きく違うのかも。

4～5年を塊として一緒にしてしまう人もいと

は思うのですが。

だって就職を考えてみれば、私は昭和48年の石油

ショックの年に入ったのです。ところが47年というのはまだ好景気で、資生堂の採用人数は300人もいるわけです。私のときは15人しかいない。で、石油ショックを乗り切った49年はまた少し増えたんだけど、僕が50年で知っている人は一人もいないんですよ。なぜか分からないけれど、52年だったかな、なぜか一人もいない年があった。それは会社の方針もあるのですけれど、組合をやっていたからよく分かるのですが、彼は51年度入社、彼は52年度入社というとか何か共通したものがあるかもしれないですね。そうすると会社の人事も、4で割れる年は不作だとかね(笑)。これは偏見なんだけど、それは採用ミスの話ですから。何かやっぱり1年1年違いますよ。

確かにオイルショックというのは僕でも記憶にあるぐらいですから、結構そのへんの1年というのは、成長過程であるが故に起伏も激しいのかもしれない。そもそも生まれるときも、さっきおっしゃったように1年の幅が実は意味があるのじゃないか。

団塊の世代の女性に対してはどう思います？

女性はやはり、団塊の世代というのは中卒から大卒までいるじゃないですか。僕たちの中学校の同期で大学に行ったのは2人しかいませんし、中学で卒業したのも結構いっぱいいるし、本当にいろいろですよ。なかなか一筋縄ではいかない、でもやはり強いですよ。同窓会に行っても本当にうるさいですよ(笑)。それくらいしか言えないな。でもやはり中学の同級生なんていうのは一緒ですよ。ビートルズとかなんとかはいけませんよ。三橋美智也と三波春夫ですよ。次世代の女性と団塊の世代の女性は相当違うんじゃないでしょうか。団塊の世代というのは団塊の世代の男と近いんじゃないですか。

うちに帰れば女房がいるけれど、それ以外では団塊の世代の女性と妻以外には付き合う場所がないんです。会社とかそういう所に行ってもあまりいないし。どこにいるかというと、コミュニティセンターとかそういう所に行けばいるでしょうけれど、そういう所

に来る人というのは外向きの人生をしていますし、それこそヨガをやったり、カラオケをやったり、そういう人たちですから、私はそういう所はあまり行かないから。

労働運動の闘士がいるんです。そういう人と昔から親しいのですけれど、その人がシャンソンを、もちろん反戦歌ですけど、それをやってその招待状が毎年来るんですよ。でも行きたくないんです。行きたくないんだけど、なかなか返事を書かないといけないので返事を書いているんだけど、結局彼女は誰にも支持されないんです。誰も行ってあげなくて、反体制派の人のグループの人たちしか行かない。一般的良識派とまでは言わないけれど、俺たちみたいなノンポリ的な人には、一切相手にされないんですよ。それは別の問題でしょうけれど。

でも確かに、団塊の世代の女性で逆に目立つ方というのは、ちょっと浮き気味かもしれないですね。時代がまだ、はっきり言うと「女性は控え目が美德」くらいの流れも残っていましたしね。

資生堂の副社長で来た岩田さんという労働省の人は、完全に男と同列で頑張ってきた人です。そうでなくて輝いている人というのは、やはり主婦として輝いていますね。それ以外の何か職業を持って輝いている人ではないですよ。

最後の質問になるのですが、こういうことをやったほうがいいんじゃないとか、こういうことに興味があるとか、何かありましたら、お聞かせください。

社会の仕組みがどうにでもなるからシニアの生き方も変わるような気がして、さっきの年金制度の崩壊なんかも変わってくると思う。

実はラオスの5番目の訓練校は介護をやるという話を皆さんとやっているわけです。でもラオス政府が認めてくれないわけです。結局今までの4つのコースはラオスに残って仕事ができるのであって、学んだ人材を日本に連れて行きたいなんていうのはラオスと

して認めてくれないのです。でも、海外の労働者が日本でこれからもっと楽に働ける時代が来ると思うんです。それは背に腹を変えられないわけですから。そうなったときにどんな価値観が生まれてくるかとか、考えますよね。

以前より、移民を受け入れるような状況になってきていますしね。緩和していついていますし。

新聞に載っていたけれど、介護施設なんかも本当にどこに行っても仕組みが同じじゃないですか。でも、60年代の造りにするとか、それよりもっと前の竈（かまど）かなんか。結局昔の雰囲気の中で暮らさせてあげることによって認知症が防止できると。だから入り口に昔の車、自分が若い頃に流行っていたような車の模様が置いてあったり、そうすることだけでも、ずいぶん快適な介護ができるとか、そういう知恵みたいなものを絞っていくと、介護というのも変わるのではないかと思うんですけれどね。

うちの親父なんか、5年前に100歳近くで死にましたけれど、恐らく死ぬ間際は面白くなかったと思うんです。自分の親はみんな家族に看取られて死んだわけです。介護施設や介護保険なんてない時代だから。うちで看取るしかなかったでしょう。だから自分が年を取れば、そうやって死んでいけるんじゃないかと思っていたのに、介護制度ができちゃって、自分がそこに行かなきゃいけなくなっちゃった。行くのが嫌で嫌でしょうがないわけです。自分の親父はそうやっておくられていったのに、俺はあんな寂しい所で死んでいくということじゃないですか。

でも俺たちはもう、自分の親もそうやって逝ったから、はなから介護施設に最後はお世話になるというのが常識だと思込んでいるから、それなりの価値観ができてくるんですけれどね。やはり介護の形というのは何か少し変えたほうがいいのかないかという気がしますね。本人のための介護じゃないじゃないですか。家族のための介護ですよ。

調査も介護に関しては両世代同じことを言っているのは、子どもには世話になりたくない。

俺はよく分かりますね。

自分の親はいつかは死ぬということで関係が絶てるのですが、子どもとの関係を生きている間に絶たないと子どもに負荷がかかるという意識がすごく強いですよね。

負荷がかかるという考え方は、いわゆる核家族化の考え方ですよ。さっき言ったみたいにラオスで介護の学校に関してラオス政府が反対しているのは、人材が日本に行ってしまうからいけないというのがあるんですけれど、もう一つは、仏教の国が、自分の親の介護を他人がするということが、どうしても違和感があると。親の介護は子どもがするのが当然だろうと。そんな反道徳的なことをやる学校なんか造れるかと言われるわけです。もちろん国が富んでくればそんな意見はなくなると思うのですが、仏教国としては当たり前のことですよ。

日本でもそれが本当にできないかということですよ。親を介護するのはやはり子どもだよと。子どもが介護できるような仕組みというのは本当にできないものかということですよ。そうすると、例えば核家族をやめて、みんなで3家族ぐらいで住みましょうとか。そうすれば誰かが見るとか。何か本当にできないのかな。年寄りが介護施設にいるというのが、あそこにいるのがつらいですよ。

今、母親が別の介護施設にいるんですけど、1週間に1回くらい行くのですが、弟が行ったり女房が行ったりするから2日に1回は誰かが行くようにしているんです。もう入って1年ちょっとになるのですが、もちろん認知症が始まっているし、体も利かない。行くと必ず「さあ、帰るべ」って言うんですよ。「家へ帰ろう」と言うんです。それしか考えていないんですよ。幸いなことにまだ私の顔を覚えているから、来ると「せがれが来た、せがれが来た」と言うんです。で、職員にも「せがれが来たから」って。で、何か水羊羹とか流動食を持ってきて、それを食べさせて小一時間もいて帰るんですが、どういうタイミングで帰ろうかと。何と言って帰ろうかと。「もう帰ろう」と言って

いるときに1人で置いて帰るわけですから、毎回断腸の思いというほど大げさではないですが、そういう気持ちにはなるわけです。そういうことはもう仕様がないわけです。みんなのいる所に車椅子で置いてそっと帰るわけです。もういつ帰るか分からないうちにそっと帰るのです。まあそういうことも忘れちゃうからいいんですけど、やはり別れるときの辛さとか後ろめたさをずっと引きずりながらやるわけです。

それをこの前、入居者と施設側の懇談会みたいなのがあって、30人ぐらい出てきたのですが、そこに行って一人ずつ感想とか希望を言ってくださいという話になって、一人ずつ言うと、「みんな良くしてくれてうちの母も明るくなりました」とか、そんなことを言うわけです。「特に希望はありません」とか。中には「食事が固い」とかいろんなことを言う人もいますが、「じゃあ池田さんは？」と言うから、俺はそのことを言ったわけです。どうしてもまだ帰ろうと。うちがどうしてもいいらしいんだと言ったら、向こうの方で「うんうん」と言っている人がいたから、「だったら皆さんにお聞きしたいんですが、皆さんは帰るときにどうやって別れますか」と言ったら、「じゃあそれについて、後で皆さんで話合しましょう」と事務所の人が言うから、相談会でその話題は終わったわけです。

ところがその後一人で15分もしゃべるおばちゃんが出たので、もう時間がなくなってしまって、「じゃあディスカッションの時間がなくなっちゃいましたね」という話になったときに、それまでに問いかは俺の一件しかなかったもので、事務局の人が「先ほどの池田さんの質問ですけど、私が代わりにお答えします」と言うんですよ。これはいい答えを出してくれるのかなと思ったら、その人が言うのには、「それは池田さん、最後に今度はいつくるからねって言えばいいですよ。そうすると明るく別れますよ」と言うんです。全く現実を見ていないんですよ。そういう人たちが運営しているんですよ。そうじゃないんだよ。画一的にしてしまうでしょう。それこそ赤ちゃん言葉でやっているわけですよ。だから日本人的な最

期を自分らしく生きていくための介護施設というのはどんなのが必要かなと。それはお金がない人が特養に行くのが今の現状だし、こんなに多くなったときにやろうといっても無理かもしれないけれど。それを常々思っているんですよ。

介護施設の七夕の短冊なんていうのは、大半が「安楽死させてくれ」というのですよ。大半が。そういう悩みに関しては次世代のほうがもっと強いでしょうね。それこそ海外移民とか海外移住とか。

冒頭おっしゃりましたが、むしろ若い世代が辛いんじゃないかと。やはり若い人がもっといい世の中にならないと、という意識が強いですか。

そのお膳立てをしていくのが団塊の世代。本当は団塊の世代がそれをしなければいけないんだと思っているんですけど。だから、ある面で団塊の世代が捨て石になるような。捨て石というと変ですけど。

以上



岡田 信一

1955年、大阪府出身
音楽プロデューサー、ミュージシャン、
元ヤマハミュージックエンタテイメント エピキュラス所属

ポプコン、世界歌謡祭等の音楽イベントや多数のコンサート制作、日経おとなのバンド大賞等のイベント制作を手がける／ラジオ NIKKEI「大人のラヂオ」のパーソナリティー

岡田さんにとって、60歳は節目でしたか？

自分では、既に一旦節目を越えた第2の人生ではあるのですが…あまり意識がないんですよね。自分の年齢は棚に上げて、こう街を歩いているネクタイを締めた背広姿のおじさんを見て、あの人は僕より上ちゃうかな。どうなんやろなと思いつつながら見ているんですけども、齢を聞くと下やったりするんですね。自分で自分を見ながら話をしてないから、やっぱり自分は気分的には非常に若いつもりというのがあるんですよね。それはええことなんか、悪いのか。打ち合わせが終わって疲れ果てて、本番が終わって終電に乗ったときに、映る自分の姿を見て、「あっ60超えてんねんや」と。

でも、60歳という切れ目は現実的にははっきりありましたよ。定年ですから。会社ではしっかりそれを。しかも60までに55で役職定年みたいなものもあったんですよ。結局人が足りなくなって、仕事を解かれはしないんですけども、一応55で部下は外してもらえるんですよ。担当課長とかというので。

定年についてのそれまでのルールとしては、管理職は退職しか手がなかったんです。ところが、法律が変わって希望すれば継続して雇わないといけないということに変わったので、それが59のときやったんですね。「管理職も残れるよ」という話になって。でもい

きなりそう言われても…、それやったらこれとこれは引き継いで残しておいたのに…、みたいなものがある。でも、全部引き継いでしまったし、することがあらへんし、これ以上おっても君らの邪魔になるだけやろ。でも、給料は本当に3分の1、4分の1になるから、逆に考えたらそれで放つてもろたほうが得かも分からへんとかと思ったんです。息子が身障者なのでその世話もあって…そういう切れ目があるなら「じゃあ、もういいや。会社は辞めちゃって自分でやろう」と。だから、すごい節目ははっきりしていませんね。

次世代高齢者研究のフェーズ1を見せてもらいましたけど結構面白い！特に「時層」という考え方がすごい面白かったですね。「なるほどな。そういう切り口か」と思っています。

定年退職したときに何か新しい生きがいを発見するとか、今までにやったことがないことをするのもいいんですけども、10代20代の頃からやってきたことにもう一度トライしてみようというのものもあるんじゃないかなということで、51歳～75歳の男女500人の調査対象者に、10代のときから各現在までに興味・関心があった

り、夢中になったことを、ファッションとか、エンタテインメントとかのカテゴリーごとに全部書いてもらってそれをまとめたんです。通常だと、調査票でそんなものを書いてもらうとみなさんかなり嫌がるんですが、調査員に聞くと、みなさん昔を思い出して嬉々として書いてくれたと。

そうですね。懐かしかったですもん。「ああ、そうやな」と思って。自分とシンクロすると自信が持てるなとも思ったし、ヒントも沢山あった。

では、岡田さんの時層をなぞる意味で、音楽に取り組みることになったきっかけみたいところから。

一番初めからね。長いですよ（笑）。

やっぱりおやじが音楽が好きだった。SP盤をすごい枚数を持っていたんですよ。でも、それはハリー・ペラフォンテとかあの辺だったんです。『バヤ・コン・ディオス』とか、あと『バナナ・ポート』。それが3歳ぐらいの頃だったんですね。実は自分ではあまり覚えてはいないんです。でも、母親に聞くと「デーオ、デエオ♪」とかというのを歌っていたというふうに言われていて…

…で、中3のときに、机を全部こう端に寄せて、ステージを作って、1日に3ステージぐらいやったかな。30分ぐらいの3ステージをそこで初めてやることになったんですよ。

やることになんねんけれども、PAなんかは当然まだない時代なので、マイクをどないしようと。当時4ワットのこれぐらいのテスコのアンプがあったんですね。それが2つ、お兄ちゃんのところにはあって。僕はもうエレキギター買ったときのアルバイトは終わっていたので、2年生ぐらいのときに、何か次のアルバイトか何かをして、薬局か何かでバイトをしたんかな。それで、8ワットのテスコの『ハチハチ』という8ワットの小さいアンプ。4スピーカーのスピーカーを買え

たんです。

それをベースに使わせて、4ワットのやつを2つギターに使って。で、インプット端子が2個あるんですよ。2個あるので、1個はエレキギター。1個にこれ、マイクで使えんのちゃうかと。

マイクで使えんのやったらマイクを作ろうということで、テレコのマイクがあるじゃないですか。あれを分解して。AKGのC451みたいに。当時ビートルズの映画が来た頃だったんですよ。屋上でやった『ゲット・バック』で使ってたやつね。

それはこういう鉄の5ミリぐらいのパイプに、先っちょにマイクが付いていて、ウレタンで巻いてあるんです。テレコのマイクを分解して、ウレタンで巻いて、パイプの中にリード線を通して…。これで先っちょはもうC451っぽい感じなんです。パイプは家の近所に捨ててあったマスプロアンテナを分解して、きゅうと伸ばして…

さらに、そのままだと立たないので、音楽室にあったスネアのスタンドをばらして、パイプを挿して挟むんです。こんなを日本橋で、東京で言うと秋葉原、大阪やと日本橋行ってリード線とかをこうきて、自分たちで作ったんです。

で、1つのアンプから1人の声と1人のギターが出る。ただし、ボリュームが1個やからバランスが取れないんですよ。マイクをまず固定して、それに合わせてギター。音色もヘチマもない。もうギターで取りあえずボリュームをコントロールして。ドラムは生に合わさなあかんから、まず歌を生ドラムに合うぐらいのボリュームにしたんかな。それに今度はギターがあまりかぶってこないようにして…。

見た目はビートルズのアップルレコーズの屋上でやっているような感じにして。服装をどうしようかと。詰め襟なので、襟を内側に折って中に入れて、こういう襟なしのビートルズが着ているやつみたいな。女の子のセーラー服のネクタイを借りて。

それでビートルズの『マネー』とか『アンド・アイ・ラヴ・ハー』とか『ツイスト・アンド・シャウト』とか。そういうのを7～8曲やったのが初めてかな。

そのとき、中学生で既に岡田さんのやっ
ていることの全てがそこに盛り込まれてい
ますよね。

全部。

そうそう。そうなんです。企画から制作、演奏、衣装もね。それから音響も。音響は機材作りから。

当時なかったの、そういうの。それで初めて人前でやって、やっぱり味を占めて。先生たちには不評だったやろうけど…。プラスバンドが体育館でやる時間につけて、こっちで客取ったろと思ってやったから。それでも4ワットでも音がでかいんですね。ブラバンに十分対抗できるぐらいの音で結構な人が入って。

当時は中学生やから、そんなことをやるやつはないから、もうすごい評判になってんけれども、いかんせん、全員丸坊主なんです。中学生、中坊や…

…ぶっちゃけて言うと、東京へ来るときの約束もミュージシャンをまだやりたいと。だから、ヤマハの社員にはなりたくない、契約やったらええよと。その代わりにちょっと音楽活動もさしてなという約束で出てきたんですよ。

で、出てきて、中島みゆきさんに関わるようになって。それとあと、世界歌謡祭とかをやるときに世界中の超一流ミュージシャンと付き合うようになるんですよ。そうすると、そのときに「ああ、僕は下手やってんな」ということを自覚したんです。

「自分がレコーディングをするとしても、自分でギター弾かんと、この人に弾いてもうたほうがええよな」と思うようになって、じゃあ、ギターはちょっと家で弾くぐらいにしようかなと。30ぐらいのときやったかな。せっかくプロデュースという仕事をさせていただくことになったので。

元々僕がバンドをやっていて、75年～80年ぐらいの間って、ミュージシャンがプロデュースをするのが結構多かった。リトル・フィートのローウェル・ジョージがいろいろなところでプロデュースしたりとかをしていたのにも興味をもっていた。ミュージシャンは30ぐらいまでやって、その後はプロデューサーや

なとか、何かおぼろげにそういうこと思ったり感じたりして、結局ミュージシャンとしては大成せずに「レコードぐらいは出したいよな」と思っててんけれども、「それはいいや」と思って封印をして、プロデューサー稼業にのめりこんでいった。そこから30年、プロデューサー一筋！

今、僕らがやっている研究というのは、これから高齢者になっていく今50代の人たちが、どういう準備をしたらいいかみたいなことにポイントを当てながらやっています。

それを考える上で、いろいろ世代別の差異とか、男女別の差異とか、あるいは職種とか経験とか、いろいろと人それぞれですけれども、岡田さんの昔からのいろいろな世代の方々とのコミュニケーションや経験から何かエピソードはありますか。

ちょうど今、本当にやってる「おとなのバンド」(2019/2/1 設立 NPO 法人おとなのバンド倶楽部)は実は自分の中では40ぐらいのときから構想はあったんですよ。それはティーンズ・ミュージック・フェスティバルをやったときに、マスターズ・ミュージック・フェスティバルみたいなものがあつたら面白いんじゃないかなと。

それはなぜかという、やっぱり当時10年以上自分もバンドをしてなかってんけれども、45ぐらいになつとったかな、やっぱりちょっとやりたくなるんですよ。でも、僕はもう仕事上なかなかそういうものもできないねんけれども、8.8ロックデーだったりとか、ポプコンだったりとかに応募してくれた方たちが「まだバンドをやりたいんですよ」と言い出した頃で。でも、実際にはやっぱり仕事があつて踏み切れないやつがほとんどだったんです。きっとこの世代のやつは、50、60になったらもいっぺんやり始めるんじゃないかなというのと、やり始めるためには何かきっかけがあつたほうがええよなとかと思って、大人のバンドというか、大人のバンドフェスティバルみたいなも

のを、あの当時出ていた人がもう一度やれるような企画を出そうと思ったのが50ぐらい。まさに時層ですね！

で、実際に形になったのは2007年『第1回日経おとなのバンド大賞』。2005年ぐらいから準備は始めてたと思うんだけど、もう一度音楽をやり始められるような土壌ができたらいいのではないかなと。その頃に広告会社の企画マンとかはワークライフバランスとかを言いだして、仕事と遊びというか、人生との何かバランスをきちんと取ってやれるような人はやっぱりいいビジネスマンであり、いいパパであり、いい社会人、みたいなことを言い始めた。

僕はそんなものはどうでもよかってんけれども(笑)、会社の中では忙しいだろうけれども、そういう状況下で50、60になったときに再び目標がもてるように、音楽をやれるような環境をつくってあげられたことはよかった。

立ち上げて、各地を回るとやっぱり「僕は、PA席のところ岡田さんを見たことがあります」というやつが出てきたんですね。「20年ぐらい前にバンドで出ていました」とか、「8.8に出ていました」とか。「ああ、こいつらがやってくれんねや」というのがすごい実感としてあって…。その実感をもって、今後NPO法人の活動もしていきます。

僕はフィールドがあるからなんでしょうかね。好きなことを小学校のときからのずっとやってきて好きなことがそのまま仕事になって、結局それで食っているから。会社の切れ目はありましたが、やってることは音楽だけなので、そういった意味での切れ目はないですね。あまりほかの人と比べて、一般の会社とのつながりがないかというところでもないんですよ。ヤマハというある意味では厳しい企業にいたから、経理もやらされ一応簿記もある程度はできるし。ほかの広告の会社とかね。製造の会社とかもいろいろなイベントとかでお付き合いがあるので。だから、まあまあ、特別な感じも自分では思っていない。

でも、意外といろいろな職種の人でも自分のところ

の会社は特別やからみたいにいる人が多いのは、すごい実感としては思ってます。僕らは音楽のことをやっているけれども、自分らはそんなに特別変わったことだとは思っていないんですよ。

でも、例えば放送局の人とかというのは、「うちは特別やから」とか。もちろん新聞社とかでもそうだけれども、「うちは特別やから」と言う。いや、「そんなことないでしょ、そんなどこも違いませんで」と思うねんけれども。ちょっとしたプライドがあるからか、「うちは特別やから」というやつが意外と多かった。

で、女の人はほら、そういう環境にはなかなかないので、多分子どもたちの学校での。調査データを見ても「学校のお友達からつながっているのが一番多い」とか書いてあってんけれども、そういうこう、格差のないところでいてるからかも分かれへんけれども、あまり「どこも一緒やね」という感覚が強いんじゃないかなと思って。

男の人はやっぱり「うちはちょっと何か特殊なんです」、うちらなんかでもやっぱり若い子なんかやったら、「やっぱりうちの職種はよそとはちょっと違いますからね」、でも、企画して、物を作って、それをお客さまに提供して…「好き嫌いはあるかも分かれへんけれども、やっていることはみんな一緒よ」という話をよくするんですけどもね。

僕らの研究の主眼は、高齢者の生きがいは何かということを見つけない。これ、調査データを見ても定年退職をすると路頭に迷う人が多い。社長とか役員とか、特に偉くなっている人ほど何をしているのか分からない。1人じゃ何もできない。秘書がない、車もない、ゴルフしかやってきていない。「ゴルフをやろうよ」と元部下に言っても、今更上司じゃない人とゴルフなんかやらないよと。

やらない。そうですね。なんでやねんと。付き合いだけでやっていただけや。

でも、女の人はさっき言っていたとおり元気な

んですね。

男は、生きがいを探せずに路頭に迷うリタイア層というのがいると。自分では何もできない。図書館に行ったり、スポーツジムに行ったり、街のカルチャースクールに入会する。ただ、彼らは生きがい探しと居場所探しを勘違いしているんですね。やるべきこと、やりたいこと。これが生きがいだと思うんですけども、何かそこから焦り始めて、居場所探しとか時間つぶしとか友達づくりを先に求めちゃっているんじゃないかな。カルチャースクールだとかスポーツジムに行けば友達ができるんじゃないかなとか、何か好きなことが見つかるんじゃないかなと思うんですけども。

僕らの仮説としては、what と why が大事で、where とか when とか who は後からついてくると思うんですよ。自分は音楽が好きだ。自分はスポーツが好きだと。何かをやっていると自然に仲間が集ってくるんだと思うんですね。

で、高齢者の生きがいとしての音楽の可能性を探りたいなど。ゴルフだ、テニスだ、スポーツもいいんですけども、スポーツはやっぱり年を取ってくると体力の限界がありますし、これは若い頃にスポーツをやっているのと、やっていないのと相当違うと思うんですよ。

————— ここからは、岡田さんと「音楽の可能性」についての意見交換です。

まず、1つ目の可能性は、「音楽は誰でも参加できる」からいいんじゃないかなと。楽器演奏ができる人、できない人。歌がうまい人、下手な人。音楽に詳しい人、詳しくない人、興味がない人も音楽と聴いたときに、小さい丸、バツ。聴く音楽、見る音楽、体感する音楽。それから歌う音楽、演奏する音楽。あとは学ぶ音楽。あとコレクションする音楽。われわれの時代の、カセッ

トテープの交換、交換する音楽とか。あと車を運転するときの走るための音楽とか、ジョギングするための音楽とか、あとはムード音楽とか…いろいろな音楽があると思うんですね。音楽が無関係な人はいないと思うんですよ。何らかの参加性が募れるんじゃないかなというのが一つ。

2つ目の可能性は、「音楽は一人でもできるし、二人でもできるし、多人数とでも楽しめる」ということ。さっき高齢者は居場所と友達探しだと。例えば生きがいって別に一人でやる生きがいを持っていたっていいわけですよ。音楽は、その要素を備えているんじゃないかなと。

3つ目の可能性は「音楽には時層がある」と。誰だって若い頃に聴いた音楽というものは結構覚えていると思うんですよ。70年代の歌謡曲とか、深夜放送とか。ラジカセとか…ソフトウェアとハードウェアが共存していたんですね。

西武渋谷店で開催された（2017年8月）『大ラジカセ展』と日本橋三越本店で開催された（2017年9月）『アナログミュージックライフ』に行ったら高齢者ばかり。

高齢者は、やっぱりすごい。そういう昔懐かしい、そういうものを買っていくんですね。あとFMエアチェック、あと10年前に『タイムスリップグリコ』というものがあって…、大人買いということができた（笑）。

おまけでシングルCDが1枚付いていたんですよ。ありました。思い出しました。それをやろうと企画したんですよ。

これ。何が入っているか、誰が入っているか分からない。

分からない。青春のポップスみたいなものが入っているんでしょ。

まさに、あの青春をもう一度！みたいな感じ。そのときにみんなおじさんたちが、僕も買ったんで

すけれども、大人買いと言ってもうコンビニに行ってケースごと買ってくるわけですよ。そうすると、おじさんたちはダブっているものなんかはみんな交換したんです。かつて、うちの会社でもそういうものがはやっただんですよ。

…みたいな、時層をくぐってきているので、そういう体験をしているので、音楽というものは極めて高齢者にとって新しい機会を生み出すのではなからうかなということですね。

可能性の4は、「音楽は生きがいと共に居場所をつくる」こと。ウォークマンだとか iPod が出てすごくいいことなんですけれども、これは逆に弊害みたいなものがあるんじゃないかなと。

自分が子どもの頃から見ると、自分の部屋と音楽とか、お店と音楽とか、街と音楽とか、もしくは車と音楽とか、という場所との関係があったと思うんですよ。それがやっぱりデジタル化して、音楽自体が、ながら音楽とかどこでも音楽になっちゃったのがちょっと残念だなという感じがして。

五感と。何かの接点とか、においと接点とかというものが関係なく来ているというのがありますね。

そうなってくると、われわれ以上の高齢者を狙っていくためには、その昔、シングル盤一枚 500 円を一生懸命小遣いをためて買って、それで、ジャケットを見ながらすり切れるまで何回も聴いたみたいな、じっくり傾聴みたいなものがあったり。

あとは場所との関係でいうと、応接間があったり、自分の部屋にはミニコンポがあったり、机の上にはラジカセがあって、何か場所と音楽との関係が非常に強くあったので何かできないかなと。街に出ればジャズ喫茶があって、名曲喫茶が、ロックバーが、ディスコがあって。ライブハウス、ね。大阪城の前だとか、原宿ホコ天だとか。あと武道館だ、厚生年金だ、中野サンプラザだ、西武球場だと、何かこう音楽との関わりが非常に強い。

武道館というのは武道をやるところ違うやろ。「い

つかは武道館」と、ミュージシャンはみんな言ってる。渡辺美里は毎年西武球場だと言ってるし、何かそういうところで音楽を何か仕掛けていくと、高齢者も元気になるし、街とか場所も元気になっていくでしょう。

ということで、そのつながりで可能性の5は「音楽は生きがいと共に地域を活性化する」。

釈迦に説法なんですけど、音楽とは元々やっぱり地域で出していて、新嘗祭だ、収穫祭だ、盆踊り、ゴスペル。何かこう高齢者の生きがいとなって、居場所となって、仲間とのツールになって、地域を活性化できればいいかなということ。

例えば、会社の帰りにふらっとライブハウスに寄ってみると、何か誰かやっているのかな。何か一杯、立ち飲み屋で飲んでいく感覚で音楽を楽しむみたいなのもいいんじゃないかなと思いますね。

あともっとやっぱり、地域のあなたの街のミュージックカフェみたいなものももっとあってもいいかなあ。碁会所とかカラオケ屋じゃなくて。

これからの高齢者は価値観も新しいし、もっと音楽で格好を良くしてあげたらいいんじゃないかな。

あなたの街のミュージックカフェ。西荻だとか吉祥寺にカフェでやたら本がいっぱいあるカフェがありますよね。その本って地元に住んでいる人が寄贈したりしてる。そうすると、その人のプライドみたいなもので、「ここからここまでの本は俺が寄贈しているんだよ」と。それ的に、レコードとかCDがあるところとか、あとビデオ。80年代のビデオを集約してかけてくれる店というのがあって、古いレコードとかビデオをそういう店に寄贈。そうすると、その人もその店に行くだろうし、何かそんなことができないかなあ。

寄贈したら何か特約みたいなものが付いて。

マスターも公募して（笑）。

日替わりで、月曜日は誰とか。

もっとあったら物々交換になっちゃってもいいんじゃないかな。あとはさっきのように、誰かを歌おう会、ビートルズを歌おう会。それから、ミニFM放送局。

ちょっと小さい草の根運動的なものなんだけれども、その地域で高齢者が高齢者のための、みんなで音楽を何かやっていくというものができたらいいかなと。

そして最後、可能性の6は「『音楽』は次世代高齢者の欲求である『自己超越』に貢献する」。

心理学的にマズローの5段階欲求というものがあるんですよ。人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものであるとして、人間の欲求は、生理的欲求、安全への欲求、社会的欲求、承認欲求、自己実現欲求と5段階あるというんですね。で、実はマズローって、亡くなる前に彼は「第6の欲求」を発見していたと言われてるんですね。5つの欲求は、自分個人の欲求の域に留まりますが、第6は、自分と社会との関係性における欲求だということですね。団塊世代は「老いた幼児」と言われています。マスボリュームによる集団心理と集団内での競争が激しく、5つのように自分のことだけに関する欲求が強い世代であると言えます。これからの高齢者はそうではなく、自己を超越して、コミュニティの発展させる欲求を抱いているのではないかと…。自分のことばかり考えるのではなく、地域のため、社会のため、次世代のために尽くすことが「カッコいい老人」で、その意味性を見出したい。「コミュニティの発展」において『音楽』は最も身近で、即効性の高い手段媒介だと考えられるのではないかと…。

今の時代は当たり前なんですけれども、やっぱりこう地域のためとか、社会のためとか、コミュニティーとか、次世代の人のために尽くすことが格好がいいと。そういう欲求が非常に強いのではないかなあ。

大きさの大小を問わず、コミュニティー的な考え方は大事。NPOもそうですよね。

コミュニティーに入ってくるための、あるいはつくるための切っ掛け、これやね。

聴くだけではなしに、一緒に関わられるような、そうや、やろう！と。今までの話の中でも「これはちょっ

と使わせていただきたいな」と思たんは、小遣いをためてやっと買った大切なレコードとか、ジャケットを眺めながらとかという、いわゆる自分に対する音楽の思い出を、その曲の思い出をしゃべってもらおうかな、きっかけにしようかなと。

音楽教室を開いていて、そこでも割と訓練みたいにしてやってんねんけれども、自分の自己紹介を毎回やっているんですね。それはなぜかという、こういうところに出たときにちゃんとしゃべれるようにしたほうがいい。しゃべれない人がやっぱり多いんですよ。そういう人たちのためにしゃべる機会をつくってあげて。テーマを決めてあげればしゃべれるしというのはあるので。例えば、今回のテーマは自分が音楽に関わったときのテーマといたら、小さいときのことやから絶対に思い出すし。紡いであげれば思い出せると思う。実験的にちょっとやってみようかなと。

自分が一番最初に生まれて初めて手に入れたドーナツ盤は、親戚のお兄ちゃんからもらったベンチャーズなんですよ。自分で買ったのは、西郷輝彦の『星のフラメンコ』なんですよ。

やっぱり、覚えていますよね。

学校の放課後の掃除のとき、ほうきを逆さまにしてテケテケテケテケ、ほうきでベンチャーズ。

深夜放送ですけれども、高齢者は夜寝られないから、NHKの『ラジオ深夜便』ってあるじゃないですか。音楽が流れているんですけれども、何というのかな、高齢者だからこの音楽という、何かすごく決め付けが多くて。今、昔の本当にもう美空ひばりさんだとかもいいんですけれども、もう少しローリング・ストーンズだとか何だとかをかけたてもいいじゃないか、なんて。

あの番組はきっと若い人が作っているんですよ。

そう。だから、若い人が作っているから、若い人から見た年寄りだと、多分、うちの息子とか20代のやつから見た僕らは老人なんですよ。それは僕らも20歳の頃に40歳ぐらいの、当時主任とか課長とか部長とかというやつは、もうそんな音楽なんか分かってい

るわけがないやない。音楽の会社にいながらですよ。

ピアノしかやっていない、ピアノ営業とかのやつやったから、向こうも「ロックが分からん」と言うて、僕らみたいな20代に任せられたというのでラッキーやったんですけれども。やっぱり見ていたら、このおっさんたちは音楽なんか分かるわけないなと思ったけれども、でも、クラシックが好きやったりとか、ポップスが好きやったり、映画音楽が好きやったりしているわけですよ。そこは、やっぱり音楽の会社やったから（笑）。

何かこう、やっぱり格好がいい老人、格好がいいって大事だと思うんですよ。

老人が引っ張っていくというかね。

知っています？DJをやっている85歳のおばあさん。ギョーザ屋をやってて、夜になるともう革ジャンを着て、革のパンツをはいて、新宿のクラブでDJをやっているんですよ。

そのおばあさんがお皿を回すときには、もう若者たちがそこに集まるらしいですよ。師匠みたいな感じで。

最近の曲をおばあさんの感覚でかける。今の曲を年寄りがやるというやつね。何かすごくいいことだなと。そこでこう若者との交流もできて。

今のおじいさん、おばあさんというか、僕らもそやねんけれども、若い人たちの音楽にはやっぱりちょっと、どの世代でもそうやったと思うねんけれども、入っていくにくいということがある。逆に言うと、彼らがルーツを探っていたときに僕らの世代におち当たるみたいなところがあるので。

聴きにこられるような環境をつくって、「おとなのバンド」をやっているのも、実はルーツ探し。僕ら自身もルーツを追っかけているかも分からへんねんけれども、取りあえず今僕らが考えているルーツはここにある音楽だよ、これが切っ掛けだよ、みたいなところを若者たちが一緒に聴きにきてくれたりしたら最高ですね。

それこそ時層ね。もっと若い世代たちが俺たちの時

層を見にくる。

この「音楽の可能性」を求めて。

歌が下手でも音楽が嫌いな人っていないと思うんですよね。

うん。そう。そうそう…

以上



川崎 友嗣

1960年、東京都出身

関西大学社会学部長 社会学研究科長 社会学部教授

元日本労働研究機構研究員（キャリアガイダンス研究担当 91年～97年）

日本キャリアデザイン学会（元常務理事 12年～16年）

発達の観点に立った生涯にわたるキャリア発達とその支援に関する理論的・実証的研究を行ってきたが、近年は引退過程の問題や若年者の問題を中心に扱っており、特にキャリア自立に関する研究を行っている。
(by 大学 HP)

専門分野や過去の研究や取り組みについて教えてください。

専門の分野は、キャリア心理学という分野なんですけれども、基本的には生涯キャリア発達の心理学という枠組みがあって、一人一人の生涯にわたるキャリア発達とその支援といった枠組みで研究や実践に取り組んできています。なので、生涯キャリア発達というのは、生まれてから死ぬまでのプロセス全部を取り上げる。時間的にはそういう長いスパンで、キャリアという概念は、いろいろなとらえ方があるんですけれども、近年でとらえられているキャリアの概念というのは、職業キャリア、ワークキャリアだけではなく、家庭生活とか地域だとか、余暇や趣味だとか、そういう様々な生活空間での活動を全部束ねたものがライフキャリアで、その中に働くという職業生活の領域も含まれるという考え方です。生涯にわたるライフキャリアの発達という枠組みでいくと、職業生活に入る前もキャリアはありますし、職業生活を退いた後もキャリアはあるわけで、そういう文脈の中で、生涯にわたる個人のキャリア発達とその支援ということをテーマに実践や研究をしてきています。

世の中全体でいくと、今、若年者という使い方がよくされますけれども、若者がいかに学校の世界から職

業の世界に移行できるかを「スクール・トゥ・ワーク」という言い方をします。日本もそうですけれども、先進国がなかなかスムーズに移行ができていないという問題があるので、日本は特に国を挙げて若年者のキャリア支援ということに力を入れていますが、個人的には、それは労働市場に参入していく時の、いかに入っていくかというところの問題ですけれども、今度は労働市場からいかに退いていくかということが非常に重要で、アメリカなどでは、リタイアメントカウンセリングというような活動を通してリタイアメントの支援をするということが行われています。

日本では、その辺は非常にキャリア支援の中でもまだまだ手薄で、厚生労働省なども、人生100年時代とか、1億総活躍社会という中で、全ての働く意欲のある高齢者を活用しようという方向の施策はいろいろあるんですけれども、完全にリタイアしていく時の仕方も中々難しいものがあるので、そこをどうふうに次の第2の人生、第3の人生、リタイアメントした後の生活を、これはまた後で話しますが、生活の再構築などが求められるので、いかにそこを乗り越えていくかというのは大きなテーマで、そこに関連して、リタイアメントに関する調査を過去に実施したことがありますし、今後もそういうリタイアメントをい

かに果たしていくかというところの調査データとか研究は、ぜひ進めていただきたいと思います。

日本ではどういふふうに自分の仕事が終わっていくか、全くそういうことを意識しないで、リタイアメントの年齢になる人も多い。会社で定年後に関する説明会が開催されても40代ぐらいだと全然実感がない、子育てで忙しい方もたくさんいらっしゃる。タイミングもたいへん難しいです。

企業の取り組みも少しずつは進んできているんです。かつてはマネープランとかファイナンシャルプラン中心の退職準備教育でしたけれども、企業によっていろいろなやり方がありますけれども、40歳になった人を集める、50歳の人を集める、そういうようなことをしていましたけれども、最近は例えば自分史を作るとか、それまでの自分の職業、人生だけじゃなく、家庭生活とかも含めて今までの人生を振り返りながら、これから先どうしていきますかという退職後のことを想定したような取り組みも、企業によって増えてきていると思うので、前のように経済面だけではなくなってきたらと思います。

ただ、一人一人が自分でどんなふうにリタイアしていくのかということについては、若年者の支援ほど明確ではないです。若年者の場合には、就職できるかできないかという答えがはっきりしているわけですが、リタイアメントの場合には、退職できるかできないかといったら、みんな退職せざるを得ないわけで、定年後の時期をしばらく仕事するのか、同じ企業で継続的に仕事をするのか、別の仕事を探すのか、全くそれ以外のところに行くのか、それを一気にやるのか段階的にやっていくのかとか、いろいろパターンはあると思うのです。それは一人一人によって望む在り方が違うと思いますから、みんなが満足いくように、自分のリタイアメントの時期をうまく対処していくというのは、基本的には一人一人がすべきことで、そこへの支援の在り方というのは難しい面があると思うんですけれども、必要だとは思っています。

以前そういう研究をされていたのですね、それはいつ頃のことですか。

本当に古いんだけど、関大に来る前と関大に来た後、JIL（旧 日本労働研究機構）という研究所にいた時です。定年を迎えた人たちを対象に、それは定年制における定年なので、在職の人もいれば辞めている人もいますけれども、2回調査をしていて、最初の1回目は定年年齢を迎えているけれども、何らかの形でまだ仕事をしている人たちを対象に調査をして、5年後にその後どうなったかというのを調査したんです。その時の主な研究的な関心というのは、どんな生活のスタイル、ライフスタイルを取っている人が引退後の生活に適応的なのかということに関心があったんです。1つはライフスタイルですけれども、もう一つは、引退ということを自分自身がポジティブに受け止めているか、ネガティブに受け止めているか、それによっても違うと思うので、その2つを明らかにするというのが主な目的だったんです。

ラフな結果でいけば、ライフスタイルの在り方というのは結構クリアで結果が出てくるんですけども、仕事中心の生活をずっと続けていた人というのは、引退に対する不安も高いし、それから引退後の生活に対する満足度も低めなんです。時期としては3つに分かれて、現役の時期と定年から仕事を完全に辞めるまでの時期と仕事を辞めてからの時期、大きく3つに分けると、仕事中心できた人は、一番引退後の満足度が低いんです。

現役の時期は仕事を中心でも、定年から引退までの間に何らかの仕事はしているので、そこで少し意識が変わって、家庭中心とか仕事以外のところが中心になった人のほうが、引退後の適応状態がいいというような結果が出たのが一つです。

あともう一つは、当然なんですけれども、引退ということポジティブにとらえている人のほうが、引退後の生活は適応的という結果で、ポジティブにとらえているかどうかをどういふふうに調査したかという、これは完璧な調査の仕方というわけではなく、一

つの例です。質問項目が8項目くらいあったんですけども、仕事を辞めるということは、次のどちらだと思いますかということで、「やる事がなくなる」と「自分で好きなことをすることができる」、どちらに近いかというような質問を8項目。そうすると、当然やる事がなくなるというのはネガティブだし、自分で好きにすることができるというのはポジティブということです。あと例えば肩書きがなくなるというふうにとらえるとか、自分が自由な立場で日常を振る舞えるようになるのとらえるのか、強制選択でどちらに近いか選んでもらうというのを8項目で傾向を見たわけです。

結局は、あまりいい言い方ではないですけども、仕事にしがみつくとするか、仕事以外のところに目を向けずに、仕事中心でずっときた人ほど、やっぱり引退期の移行というのは難しい可能性があるということです。ただ難しいと思うのは、その世代は団塊の世代より前の世代ですけども、団塊世代より前だから、明らかに若いときは仕事中心であることが世の中の価値観だった世代の人たちだと思うんですけども、ライフスタイルってそう簡単に変えられないから、早い時期から、ライフワークバランス的な取り組みを進めていくのが望ましいと言われるわけです。現に仕事中心の人がいるとして、それに代わるものって中々見いだすのは難しいと思うので、強制的に趣味をしましよとか地域と関わらしましよと言ったって、それはうまくいかないわけです。特に退職してからというのは余計難しく、今まで地域との関わりがないのに、急にその中で地域の輪の中に入っていきなると無理ですよ。

そういう意味で、理屈の上でいけば、早いうちからいろいろなライフスタイルの在り方を考えなきゃいけないということにはなるんですけども、でも退職後のことを考えて就職したときから過ごすというのはおかしいわけで…、今いろんなことをいっぺんに言ってしまうんですけども。

理屈からいくと、今のような調査データから分かることというのは、バランスのよいライフスタイルは必

要だということになるんだけど、それにうまく合わせられる人とそうじゃない人がいるので、本人の意思に反して合わせてもあまりよくない可能性はあると思います。なので、すごく難しいと思うのは、じゃあ自分が思うようなライフスタイルを常々ずっと過ごしていたらいいのかといたら、それはまたそうではないから、そこは個別性も高いし難しいところだと思うんです。

例えば男女の違いをみると、今最も大事な友達は誰かという質問で、男性は職場関係や学校関係が多く、女性は所謂ママ友が多くて、ママ友イコール居住地域だったりする傾向にあるので、その一方でリタイア後の男性は大変という結果が調査からも出ていました。

メディアの用語ですけども、定年ショックというのは、今の日本の社会では男性の問題であるわけですが、それは女性の就業率が上がったり勤続年数も伸びたりしているけれども、現実にはフルタイムで定年まで過ごすという人が、まだ希望していてもそのとおりにならない人のほうが多いので、年齢別の就業率を見れば、M字型の就業率のMの底は随分上がってきたし、あまり落ち込まなくなりましたよね。それと同時に、M字型の話でいけば、谷の底の時期が80年代に比べたら10歳ぐらいい遅くなっているんで、晩婚化の影響ですかね。そういう変化はあるので、昔ほどクリアなM字にはならなくなりましたが、男性みたくに台形にはなっていないし、欧米ではほとんどみんな台形で、男性も女性も一緒ですけども、しかも日本の場合、M字型の2つ目の山のほうでいけば、一度退職して、子育てが一段落して再就職する人は、まだまだほとんどが非正規雇用の仕事なので、特殊な専門職でないと、なかなか正規雇用には戻れないですよ。

そういうこともあるので、フルタイムでずっと仕事をしてきた人が、仕事からリタイアしたときに生活も変えなきゃいけないと同時に、心理学の言葉で言うならば、アイデンティティーが問い直されるというか、

自己の在り方を再構築しなければいけないという意味で大きい転換期を迎える定年ショックというのは男性の問題で、それは多分仕事をずっと継続してきたというだけではなくて、人との関わりが仕事関係中心の人も多かったからだと思うんです。

でも、先ほどの話で、学生時代というのが出てきているというのは、それは随分新しい動きだと思います。一昔、二昔前だと、仕事も職場仲間、オフの関わりも仕事仲間という、高度成長期の時期なんかはそれが当たり前だったわけじゃないですか。でも、今の団塊の世代辺りからかもしれないけれども、仕事のオンとオフがかなりはっきり分かれるようになってきたから、オンの関わりとオフでの人間関係のネットワークというのは別のものができてきていると思うので、そういう意味では、まだ定年ショックの在り方は和らいできているかもしれないです。

女性の場合、それと全く同じような構造で現れるとされているのは、いわゆる空の巣症候群です。子育てが一段落して、子育てが生きがいみたいに思っていた女性が、子どもが巣立ったときに巣の中が空っぽになって、自分の存在価値とか人生の意味を見いだせなくなって、生活の在り方とか自分自身の在り方の再構築が求められる。全ての人になるわけではない。メカニズムとしては、定年ショックと全く一緒なんです。一緒なんだけれども、定年ショックは老年期が近付いて、老年期への入り口でもあるので、その分余計に変化の影響は大きいと思うんです。

我々の調査結果では、老後意識に関して健康と経済と趣味は有意に差があって、高齢者層の得点が高く、ポジティブです。他の項目においても仕事だけが次世代高齢者層のポイントが若干高く、あとは全部高齢者が高く、高齢者層の方が展望があるというか、ポジティブであるという結果が出ています。

これはとても興味深い結果で、団塊世代、高齢者層のほうが次世代高齢者層よりもポジティブな人たちなんだという見方もあり得るかもしれないですけど

も、もう一つ可能性としてあるのは、年齢の影響があって、51歳から60歳までの人たちというのは、今後の見通しということに関しては、自分がリタイアしてどうなっていくのかとか老年期をどういうふうに過ごしていくのかということがまだ見通しが持てない段階なので、そういう大きい変化が近付いている直前の年齢の方たちだと思うので、そういうときは、全体的に不安が高まったりネガティブな意識になったりするということは他の調査からも出ているんです。66歳以上の高齢者層で75歳までが対象ですので、この人たちは、ある意味少し安定的な引退後の生活が成り立っているというか、もしそこで再構築ということがあるとするならば、再構築の前後という見方もできるので、それで自分なりに適応しつつ、見通しを持ってきているので、意識がポジティブになっているという可能性も考えられると思います。

だから、職業に就いていて、自分はいつ辞めるんだろうとか、辞めた後どうなるんだろうということの見通しが立たないと当然不安になるわけですよね。だから経済面でも、自分は、寿命が長くなっている人生80年時代、100年時代という中でやっていけるのかという不安も高いでしょうし、健康についても、世の中全体で年を取ったら健康状態は悪くなるという見方も強いですから、そういうところで差が出てきているのではないかなと思うんです。趣味についても、今の調査時の段階でどの程度趣味を、現実の取り組みとか見通しが立っているかどうかの違いの可能性もあると思うんです。それから健康は、聞き方によっても随分違いますけれども、それも自分自身が高齢者であるとか、お年寄り、表現はいろいろありますけれども、高齢者であるという自覚や意識を持っているかどうかによっても違いは出てくると思うんです。

老年心理学の中では、向老意識、「向かう」という字に「老いる」と書いた向老意識とか、老成自覚という言い方をしますけれども、自分はまだまだ若いんだと思っているのか、それとも自分はもう年を取ったと思っているのかでいろいろ違いはありますよね。まだ

まだ自分は若いと思っているということは、老いを受け入れるのに抵抗があるので、でもまだ若いから自信を持ってやっていけるという人もいるけれども、老いたときにどうなるかという不安も高いわけで、それに対して自分はもう年老いているというのを受容している人の場合、見通しが立ってきていけば不安も低くなるというようなことと関連している気がします。

ただ団塊の世代プラス戦中派の世代という、世代と年齢の影響というのを分けてとらえるのは難しいですけれども、そうは言っても、世代の影響も入っているかもしれないし、個人の年齢の発達段階とか年齢の影響も両方入っているような気がします。

この調査では、質問に答えられる方を対象にするということも含めて70前後を高齢者にしていきますけれども、後期高齢者になったら、やっぱりちょっと不安という人も次世代高齢者と同様にいるのかもしれない。まさに向老意識なのかもしれません。

人口統計学的には、WHOが決めているんですけども、65歳以上が高齢者人口という決め方が一つあります。でも、どこからが高齢者かというのは基準は一つではないので、例えば昔、労働省は55歳以上を高齢者と言っていたんですけども、それは高齢労働者という意味です。働く中で55歳以上を高齢者と言っていましたけれども、それと老年心理学の分野では、昔から年齢によって、今でいう前期高齢者、後期高齢者プラス超高齢者の分け方は、65歳から75歳はヤングオールドという言い方があるんです。75歳からはオールドオールドなんですけれども、85歳より上は何ていうか知っていますか？ヤングオールド、オールドオールドときて。スーパーオールド。ウイスキーのブランドみたいな。ヤングオールド、オールドオールド、スーパーオールド。スーパーオールドとかベリーオールドというふうに言います。だから、そこは幾つかの疫学的なデータなんかでも、75歳以上だと認知症の発症率が上がるとか、そういう人間の生物としての影響が出てくるというものもあるでしょうけれど

ども、本人自身が自分自身をどうとらえているかということの影響が大きいかもしれないです。65歳になる、今だったら、昔は60歳がそうだったですけども、60歳になると、地域から老人会の案内が送られてきて。「老人会」今そんな言葉は使わないけれども、自分はもう老人扱いかい？と思うようなことが、今は65歳があります。65歳辺りをどう乗り越えていくのかということも、社会全体がそういう枠組みを作っているところがあるかもしれないですね。そういう意味で51歳から60歳の次世代高齢者層の中でも、もしかしたら50代前半よりも50代後半のほうが、だんだんに不安になる傾向が強いのもかもしれません。そういう時期が近付いてきているということがあるだけに。

定年延長とか雇用延長との関係で、60代前半において「何をしようか」「どうしたらいいんだ」みたいな渦中にいるようで、調査においても最も不安傾向が強かった。

かつて20年前ぐらいか、「どれくらいまで働きたいですか」「なぜ働きたいですか」、働き続けたいという人には「なぜ働きたいか」、リタイアしたいという人には「なぜリタイアしたいか」ということについての国際比較調査があって、日本人はかなり特殊だったんです。「健康のため」という答えが多くて。

欧米人に理解されないのは、欧米人は健康のために早くリタイアしたい。こんな仕事でストレスを抱えたり、こんな生活をいつまでもしたりしていたら健康に悪いから早くリタイアして、経済的に許すならば自分の好きなことをして過ごしたいんだと。だからハッピーリタイアメントという言葉は、アメリカなんかでは一つの理想の姿であるわけです。日本の場合だと、仕事に依存していた世代の人たちは、仕事を辞めたら何もすることがなくなっちゃうから、働ける限りは働きたい。むしろこれまで仕事をしてきたのを急に辞めたら健康を害してしまうという意識があって、何もすることがなくなって、ぼやっとしていたら…。だからこそ仕事を続けたいという意識だったんですけども、今はもうだいぶ変わってきているでしょうね。

それと都市部では通勤が大変だから仕事は辞めたいという人が多いです。満員電車のラッシュに乗って、1時間半なり2時間なりとなると、仕事そのものは耐えられるけれども、通勤に体力が耐えられないという、それは大都市部の話ですけれども。

男女間の違いみたいなものは、女性のほうがポジティブというか、うまく生きている感がデータの的に否めません。

これも一般的によく見られる傾向だと思いますけれども、女性のほうが、ネットワークの構築の仕方が男性と違って横に張っているというのがあります。子どもの関係を通してとか趣味だったり習い事だったり、自分自身の学生時代だとかいろいろなところでネットワークを構築しているパターンは多いと思うんです。男性は、かつては仕事仲間が中心で、オンもオフも職場の人間関係というところから、先ほどの話ではオフは学生時代の仲間とかとずっと継続してというのはあるんでしょうけれども、でも女性のほうがそういうネットワークを構築して、それを維持していきながら、そこで自分の活動を継続して、自分の存在意義とか自分の居場所とか、そういうものが根付いている傾向は強いと思うので、それが現れているのではないかと思います。

だから、特に仕事以外のところでいろいろネットワークがあれば、リタイアメントのときの影響というのは、それほどないわけですが、今の高齢者世代、あるいは次世代のところは、随分以前よりは変わってきたとはいえ、仕事を通してというのは、自分が所属している企業の仲間だけじゃなくて、取引先も含め、いろいろな仕事を通して知り合った人たちのネットワークというのは、一定の重要性を持っていると思うので、もちろんその人たちとも仕事を辞めた後も付き合う、関わっていくというやり方はあるでしょうけれども、でもリタイアメントの影響を受ける可能性は大きいので、そこは男性と女性の違いではないかと思っています。

最後に本研究を俯瞰（ふかん）して高齢者に

フォーカスするのであれば、こういう視点のほうが今は重要であるといったアドバイスをいただけませんか。

まず調査データはとても興味深く見させていただいたので、面白い調査だと思います。分析もきちっとした手続きを踏んでされているので、傾向が分かりやすく示されて、図示されていますし、研究の所定の手続きを踏んで分析もされているので、そういう意味では非常に価値のある調査結果だと思います。

一番僕自身がライフキャリアという視点で生涯ということで行くと、人生の後半期のキャリアの在り方というのは、まさにワークキャリアからライフキャリアにどう移行していくか。職業中心とは言わないかもしれませんが、職業の領域がなくなるときに、どう再構築をしていくかというテーマなので、そういう意味では内容的にとっても面白いんですけども、先ほどもありましたように、横断的な調査、2つの年齢の異なるグループを同時に調査しているので、そこから読み取れることもありますけれども、何か変化を見ようというときには、中々読み取りきれないところもあるので、難しいことではありますけれども、可能であれば縦断的な調査で、全員ではなくても3年後とか5年後にもまた協力してもらえる人に調査を、データを収集するということがあると、今50代の人たちがブランクになっている60から65の間はどんな動きがあって、その結果として65以上の人生にどんなふうに影響してくるのかというのも見えてくると思うので、そういう継続的に取るものは、そんなに調査項目が多くなってもいいかもしれないですけども、そういう変化をぜひ今後調査データとして取っていただくと、より結果がクリアに分かるようになるのかなと思います。

それから自分がコミットしたいとか、どこを重視しているかという価値観みたいなものを含めてとらえる概念もあると思いますけれども、これは9つでデータを取られたというのは、とてもいいと思うんです。基本的にこういうようなジャンルをどういうふうに分けるかというときに、一番少ないと2つですよ。

仕事、それ以外、オンオフですよ。でも家庭というのはずっと重要な領域なので、3つぐらいでとらえると、仕事、家庭、それ以外とか、第3領域と呼ぶときもあります。余暇とか趣味とかを入れて。もうちょっと増やして4つぐらいで見ると、仕事、家庭、余暇や趣味と地域です。ただ日本の場合には、地域社会での関わりというのは極めて少ないので、これを入れても、概念上はあっても現実にはあまり機能していないと思うんです。そういう研究では、それ以降、5つ、6つ、7つ、8つ、9ついっぱいあるんです。増やしていくときに、学びというのが出てきたりするんです。心理学がやっている調査だと、そういう中に自分というのを入れる場合があるんです。

例えばイメージしづらいかもしれませんが、ここに9つのジャンルがあって、あなたはお金や時間をどこに一番つぎ込みたいですかという質問で世代による違いを見るとイメージしやすいと思います。自分は仕事中心です、お金も時間も仕事という人もいれば、友人、家庭という人もいます。自分は若いときは仕事中心だったけれども、これからは健康にお金もつぎ込んで健康を維持していきたいとかあるじゃないですか。学びというのは自己研鑽とか、若いときからずっとあるので、これはそういう意味でいろんな軸が入っていてとても面白いんですが、最後のほうに、特に人生の最後の段階になってくると、老年期のとらえ方っていろいろありますけれども、今はまだまだ老年期は老いていく衰退期であるというとらえ方が多いと思うので、老年期をよりポジティブなものとして世の中が描くことになれば、みんなが早く年老いたいとか、年老いることを恐れない、不安を感じない世の中になるわけです。その時に身体的な機能や能力はどうしても低下するので、どういう側面がより上向きになっていくかという、やっぱり価値観とか自分自身の、心理学でいう自己実現という言い方がありますけれども、自分自身を高めていくとか、そういう側面が出てくる必要があると思うんです。

早い話、何が生きがいですかといったとき、今ゲー

トボールなんかはしていない。何か軽いスポーツありますか？ゴルフはちょっと重いのかもかもしれないけれども、テニスなんか年取ってやっている人もいるから、テニスです、卓球ですという人が健康を害したらできなくなるわけですよ。私は孫が生きがいでという人もいるわけで、でも孫も何かの理由で子ども世帯が転勤で遠くへ行っちゃったら会えなくなるということがあります。そういうふうにしていく可能性があるものですけども、自分自身に対する価値観を高めていくとか、自分自身の内面的なものというのは失うものがないので、そういう側面を考えると、老年期をとらえるときに、やっぱり価値的な側面というのはどうしても必要になってくるわけです。

そういうことを考えると、ここにどう項目で入れるかは別として、自分というようなものを入れても面白いかもしれないです。そうすると、他のものは低下していても、自分領域だけ高まっていく可能性はあるかもしれない。

例えば脳血管障害で軽い麻痺が残ったとか、車いすの生活になったとか、身体的な機能が低下して、今までやっていたことができなくなったけれども、そういう中で、例えば自分史とか自分を振り返るといようなことを通して、自分がどんなふうな人生を過ごしてきたのかを振り返りつつ、これからの方向性を定めるとか、東洋的な世界というか、自分の世界というのかな。他者との関わり以外に、そういう価値の世界というのはあると思うので、ある意味はかなく見える、聞こえる面があるかもしれません。逆に身体的な機能とか健康を損なったからこそ、そういう面に気付くこともあるので、興味深いと思います。

本研究の調査設問の中にも、自己肯定感、例えば社交性があるという自分自身の内面の評価は聞いているんです。自己の価値を高めるという意識とは異なりますが、そこがポジティブだと、趣味、友人といった項目のスコアも高かったり、配偶者との関係もよかったりといったことがあります。

老年期を適応的に過ごすためにどうあるべきかということに関して、老年社会学の分野で有名な2つの理論があって、活動理論、社会的活動理論というのと社会的離脱理論というのがあるんです。

社会的活動理論というのが今言われていたことで、仕事を辞めても積極的に友達と関わったりボランティアをしたり、趣味をやったり社会との関わりを維持していくことが適応的な老年期につながる。だから活動をなるべくしていきましょうという考え方です。

もう一つの社会的離脱理論というのは、当然世代交代もしていかなければいけないので、職場だけじゃなくて世の中全体の社会的な世代交代というようなことを考えると、社会的な活動を必ずしも維持する必要はなくて、そういうことによって社会全体の、個人の感覚と少しずれるところがあるかもしれませんけれども、そういうところに意義を見いだすことができれば、社会から段々に退いていくことは決して不適応にはつながらないという考え方があるんです。

一般の人にとって、維持していくのが自然だし寂しくないし、そのほうが何となくハッピーな老年期を送れそうだと思うので、それはそれでオーケーなんですけれども、さっき言ったように、病気とか体力の衰えでできなくなることがあるので、そういうときに離脱理論的なほうにスイッチしていくというのか、そのためにこの中で自分の人生を振り返ってどんなことが楽しかったかというのがあります。けれども、ライフレビューという言い方をしますよね。自分の人生を振り返って、振り返ることの意味というのは、自分の人生に対して意味を見いだして、それが失われたから駄目じゃなくて、それに基づいて自分はこれからどんなふうに生きていくのかということと、今までのポジティブだったところに焦点化すれば、それは自分の人生を肯定的に評価することになるので、そういうことを軸にしながらこれからを充実したものとして過ごしていくという、少し無理があるかもしれませんが、考え方があります。

でも一般には誰でもできるのかと思ったら、相当知

的水準が高かったり、自分自身の内面を見つめることができたりするような人だったらうまくいくけれども、そうじゃなかったら中々難しいので、一般的には活動理論の考え方が理解されやすいと思いますし、多くの人にとっては、それが支えになると思うんです。

社会的活動理論というのは、今まで言われていることなんですが、僕自身で3つのRというのを考えたことがあって、大したことではないんですが、活動理論に基づいた場合には、老年期を適応的に過ごすには3つのRが必要で、1つ目はリレーション (relation)、関係です。1人ではやっぱりやっていけないから、友達とか仲間で、仲間がいれば、そこに生じてくるのがロール (role) ということです。何らかの役割で誰かの役に立つとか、みんなとの関わりの中で、自分はこういう立ち位置でポジションを持っているという。3つ目が、日本風に言えばリリーフ (relief) です。野球のピッチャーのリリーフですけれども、これは安心という意味があります。全部つながっていると思うんですけれども、リレーションを失ったら全部失うという可能性があるので、リレーションを構築して、維持しながら、そこで何らかのロールを持っていれば、自分が安心して生活できるという面は現実的にはあり得ると思います。

孫がいる、孫が生まれたということで役割が生じたりするわけですから、家庭、家族も含めてそうですね。だから例えば特別養護老人ホームなんかで、基本的には利用者の人は何もしないけれども、おしぼりをたたむとか、そういうのを役割として施設の側から与えてもらって、それで本人が自分のことをポジティブに受け止められるようにというようなこともありますよね。

以上



成 本 迅

1971年、奈良県出身
京都府立医科大学大学院教授
日本精神神経学会・日本老年精神医学会専門医・指導医
日本生物学的精神医学会・日本神経精神医学会・日本老年精神医学会 各評議員
日本老年行動科学会 理事／専門は老年精神医学

行政、医師会、介護関係者等と共に京都認知症総合対策推進計画（新・京都市オレンジプラン）の策定を実施

はじめに研究活動を中心に自己紹介をお願いします。

私自身は、基本は精神科医で、精神科医として認知症の方を専門に診るということで、分野は老年精神医学分野です。普段は認知症の方の診療が一番大きな仕事です。

大学に在籍していますので、研究ということで認知症の方を、その脳の機能だったり認知機能だったり、それから精神症状だったりというアセスメントと言いますか、評価と言いますか、その手法とか病気ごとの違いとか、そういう研究を普段はしてはしまして、それを発展させる形で、どうしても認知症の方が様々なことの理解が難しくなったり、自分のことを表現するのが難しくなったり、社会生活に支障が出るということがありますので、まず最初にやったのが医療行為に関する同意の能力だとか、ご本人の意向をどうやって聞き取ったらいいかとか、そういう研究を行いました。

やがて、例えば金融機関において行員の方が「この人が認知症かどうか分からないし、この人にこういうリスクの高い商品を買っていいかな」とか、後から「『認知症だ』と親族に文句を言われぬか」とか、そのためには能力の評価が必要だということがあります。また、弁護士さんとか司法書士さんも遺言を引き受ける

時に「その人がちゃんと遺言する能力があるのか」という能力評価が必要になり、御本人の意向を汲み取って、それに近いことをやっていく意思決定の支援というのが大事だということが分かって来まして、研究が広がっているというのが現状です。

法律関係の例を挙げますと、「成年後見制度」が一番関わっているテーマですけれども、成年後見制度に移行するためには、その人の能力が下がっているということが証明されないといけないので、当然能力評価は必要ですし、成年後見制度があるからといって、後見人が勝手に全部決めるわけではないので、本人の意向を聞き取らないといけないんです。そのところで意思決定の支援が必要になってきますので、法律家の先生方との付き合いが昨今は多くなってきています。

法律家の先生たちと一緒に何らかの基準を設けるといったこともあるのですか。

法律家の先生は、そういう基準というのがお好きなので、「点数みたいなので出るのはないですか」といったニーズは凄く高いのです。老年精神医学を専門にしている身からすると、その時その時によっても状態は変動するし、我々の目から見ても、例えば鬱があると一過性で少し能力が下がっているとか、認知症では譫妄状態といって意識がぼんやりしたりすることがある

のですけれども、そういう時も一過性で能力が下がったりします。弁護士さんとか司法書士さんとかに、「そんなに簡単にチェックできるものでもない」と思いつつ、でも「この人は絶対大丈夫とか」「この人はちょっと能力が下がっている可能性があるから、もうちょっときっちりした評価をしてもらわないといけない」とか、そういう入り口のところは弁護士さんとか司法書士さんにやってもらわないといけないので、そういう時に使えるチェックリストみたいなものを遺言に関して作ってほぼ完成したので、今後、公表しようかと思っていますところなんです。

能力の有無を問われるといった状況を前提にそもそも法律が作られていないということですか。

法律の世界での成年後見に関しては、いろんな財産管理とかに関して、その人ができるかどうかを評価するということになっているのですけれども、なかなか医者以外に評価するのが難しいので、医師の診断書で決めるという形にはなっています。本来は裁判所が決定することなので「医師の意見を参考に」と今もそうは言っているのですけれども、家庭裁判所が判断をするという立て付けにはなっているのですけれども、ほとんど医師の意見がそのまま反映されているような感じなんです。

成年後見の分野はそうなのですけれども、本当を言うと、その前のところ、金融機関で、明らかに預金を下ろすとか、単純なことだったらいいのですけれども、資産形成したい高齢者の方がまだまだおられるので、危ないというか、元本割れのリスクのあるような商品を売ろうというときには、能力の評価が本当は必要だと思うのですが、そこについては、あんまりきちんとした基準がなく、それぞれ金融庁が適合性の原則というのを出して、それに沿ってやりなさいと言っているだけで、各銀行がそれを解釈してやっているというような感じなのです。

ばらつきがあるということでしょうか。

それはかなりぶれていると思います。中小の証券会社とか金融機関でも、中小になればなるほど甘く

て、大手になればなるほど厳しくし過ぎていて、ほとんど75歳以上をはじくみたいな感じになっちゃうので、もうちょっとみんなの寄って立つスタンダードみたいなのができたらいいと思っています。

個人的なことでも結構なのですが、いわゆる高齢者、高齢化社会に関してのご意見とございますか、どうお感じになっていきますでしょうか。

一個人に戻ってというようなことも含めてですね。そうですね。今、両親が70、80代に差し掛かってきて、いろいろ病気をしたりして、これから介護の問題が出てくると思うのですけれども、うちの両親は団塊の世代で非常に人数が多い世代で、私も団塊ジュニア世代で人数が多いのですけれども、この団塊の世代と団塊ジュニア世代で何かを成し遂げたほうが良いのじゃないかと思っていて、その高齢化社会に対する処方箋というか、従来やった形と違うようなことですね。新しい発想で以前とは全く異なるようなことをやって、何か残していけたらいいのかなと。これから高齢化を迎える中国とか他の国もありますので、そういうところで普遍的に使ってもらえるようなもの、社会システムとか法律の仕組みとか。そういう意味では、高齢化社会、今の団塊ジュニア世代に生まれたのが運命だと思っていますので、高齢化社会を比較的ポジティブには受け入れています。

団塊の世代の子供の層である団塊ジュニアとして、社会に対して新しい高齢者像なのか、いい言葉がないのですけれども、そういうものが創られようとしている。

そうですね。そういう意味ではすごく面白い時代に生きているのかと思います。ひょっとしたら、この先あんまり他の世界で現れないかもしれないし、でも一応東南アジアとか中国は、何十年か後に同じような状況になることは予測されています。たまに海外の話聞くことがありますけれども、全然起きている現象が違うと言うべきか、こんなに地域の高齢者の方が一人暮らしだったり、老々で夫婦お二人暮らしというのがありふれている世界というのは、海外にはほとんどないので、高齢者住宅だったり CCRC みたいなところに集まって暮らされていたりとか、それも人

数も少ないですし、国民全体の割合からすると。

そういうモデルと日本は全然違うので、いずれ海外のモデルと同じように、CCRCみたいなのを作って囲い込まないといけなかったりするのかもしれないですけども、人数、ボリュームが圧倒的に多いので、違うソリューションがあったほうが良いのじゃないかということと、幸い日本には団塊の世代の方々が稼いだお金があるので、長い目で見れば足りないかもしれないけれども、少なくとも今はあるので、海外よりは圧倒的に介護のサービス内容も充実していますし、医療ももちろん充実していますので、こういう恵まれた環境である間に、何か思い切ったことをしたらいいんじゃないかという感じです。

高齢者に関する取り組みや研究では、どのようなことを期待するとか、「もっとこういうことをやったほうが良い」というようなことも含めて、教えていただけますか。

高齢者で単身が増えていて、そんなに密な付き合いって求めているような気がするのです。せっかく農村の濃い関係性から離れて都心に出てこられた世代なので、うちの母もそんな感じなのですけれども、高齢になるにつれ人間関係を絞っていくという調査結果もあるので、そんなに今からコミュニティーを作り直しましょうとか、もっと近所と仲良くしましょうというのは無理だと思います。そうじゃないような形で緩く高齢者同士が繋がれたりとか、趣味を同じくする人同士が繋がれたりとか、そういう仕掛けづくりみたいな、そういうのがもっとできるといいのかなと思っています。

今、Facebookもかなり高齢者でも活用されている方が増えてきているということなのですけれども、そういうのがもうちょっと普及してきて、高齢者なり人間関係の構築みたいなのが、そこでもう一度図れるようなことができたと思います。多分それは行政が何かをすればとか、そんなじゃなく、民間がお金を取れるようなサービスを考えて、基盤はFacebookでもいいと思うのですけれども、その上で何かをやるとい

うことが、もっと出てきたらいいなと思うのです。

今回提案しようと思っている研究もそうなのですけども、どうしても僕たちの発想として「高齢者はこういうもの」「認知症の人はこういうもの」というイメージがあって、だから若い人と違って、こういう商品を作ったらどうかとか、こういうサービスをつくったらどうかという発想でやっちゃって、結局見向きもされないみたいなことが多いと思うのです。医療は、幸い必要というのははっきりしているので、ニーズと供給のすれ違いというのはないのですけれども、それ以外のライフスタイルとかに関係することについては、もっと当事者の方の意見を反映させるような、そういう場をもうちょっと作っていくのが良いのじゃないかと思っています。

認知症に関しても、医療に関しては特にニーズとか関係なく、病状に合わせて僕らは治療するのでいいのですけれども、認知症の方のライフスタイルということになったり、介護のケアとなったりすると、ご本人の意向とか、好みというのが非常に重要なので、当事者グループをつくって、当事者からいろいろ話を聞くというのが今すごく広がってきているのです。認知症の方なので、いろいろご自身の意見を表明したりとかは出来難いところがあるのですけれども、そういうことをカバーしながらもっと聞いていこうということなんです。確かに直接そういう場で聞くと、なるほどというようなことは必ず毎回1~2個はあるので、そういう機会をもっと作っていくと良いだろうと思って、研究プロジェクトの提案にも入れているのです。

若い人のニーズというのは、ある時ブームみたいなもので「ワーツ」とみんな同じことを考えたり、みんな同じものを好きになったりと思うのですけれども、高齢者の方、高齢になればなるほどバラツキが多くなるというのは間違いないのです。それまでの経験だったり、その時の健康状態だったり、親子の関係だったりも影響する。なので、メディアの側から見たり、企業のマーケティングから見たりしても、ブームになりそうな物を探すのは難しいと思うのです。でも、そ

ういう当事者のところから聞き取ることで、ある程度共通して使ってもらえそうなこととか、共通してみんなが求めていることが分かってきたり、あるいはこちら側からそういうのを聞いて、一緒にライフスタイルの提案みたいなどころまでやってみたり、そういうこともあって良いんじゃないかと思っています。これまでは、高齢者でこういうことが出来なくなるからこういうサポートとか、見守ってとか、そういうことばかり考えてきたのですけれども、ここ1~2年、それは間違っていたんじゃないかと。医療の発想なのです。足りないところを直してあげてというのは。

「健常者」という言葉に責任は何もないんですけども、「健常者」という言葉が与える印象、そこに戻らないといけないみたいな、永遠に20歳には戻れないのに戻らないといけないみたいな感じですか。

何かしんどくなっちゃうんですね、そうすると。でも医療に求められているのは元に戻すみたいなことが多いので、だから我々医療者は、なかなかそこから離れられないんです。負けたみたいな感じになっちゃうので、それを放棄すると。

でも、その時その時の状態で幸福感を持って過ごせれば、それでいいことなので、必ずしも戻る必要はない、戻るということに価値を置くと、しんどくなると思っているんです。

次に、我々の研究に関することで、特に印象に残るといえるか、何か印象に残っているようなことがあればお話しいただけますか。

僕たちの視点は局地戦というか、あまり俯瞰（ふかん）する目が持てないというのがあるので、外来で見ている人で「こんなことが起きていた」とか「あんなことが起きていた」とか、そういうレベルでどうしても物事を語ってしまうので、マスで捉えていらっしゃるところに僕は関心を持ちました。

千人とか、そういう単位で見ると、こういう動向があるんだという量的なところ。質的なところは僕らは普段接する患者さんとかで見るので、そういう量

的なところからもう少し客観性の高い知見を出してこられるところが、調査に関して興味がある気がします。

スタンダードが分かって、初めて目の前にいる人がどうかというところ、どうずれているのかが分かってくるところがあるので、どうしてもその人の問題がみんな共有されている問題みたいに思ってしまうがちなので、そういう意味でのスタンダードを知ることの意味があると思います。

あとはGPS調査、個別性のところも切り込んでいらっしゃるの、個別性と量的なところがうまくマッチングしていくと、よりいいのかなと思います。なかなか難しいですね、マスでとらえたところと個別のところと突き合わせていくのは。

生きがいよりも居場所を探すような傾向が、調査結果からも以前に実施した高齢者のGPS調査においても見られました。

何となく分かる気がします。患者さんで来られた方々の発症する前の生活をお聞きしていると、積極的にセミナーに行ったりしゃったり、図書館でいろいろ調べ物をされていたり、そういうことをされていたんですけども、ある時から出なくなったと思ったら認知症を発症していたみたいな、つながりで一応前の生活もお聞きするので、今お話をお聞きしたら、確かにそうですね。

我々は70歳前後と50代とを比較して研究したんですけども、医学的に言うと、単なる加齢かもしれませんが、先生はこういうことはどう思われますか。

高齢になってくると、経験とかがいろいろなのでバラツキが大きくなるんですけども、それは世代間にも言えると思うんです。ある世代の中で、当然バラツキも多くなりますし、ただ高齢になったときにどうなるかという意味で言うと、ジェネレーションが違っていると、してきた経験が全然違うので、ここに到達したときにどうなるかというのがだいぶ違ってくるんじゃないかと思うんです。10代とかその辺りというのは、生物学的にはみんな大体均一なので、そんなに世代が変

わっても、いろいろ言われますけれども、そうは大きく変わらないんじゃないかと思いますが、年齢が上のほうになってくれば、ますますそういうのが変わってくると思うので、肉体の衰えへの対応とか、あと当然社会システムも変わってくるので、そういう意味では非常に興味深いと思うんです。

ただ変数が多くなり過ぎるので、70歳前後と50代を比較して、こういう違いがありますとなったときに、それが経験から来るものか社会システムから来るものか。実際50歳の方が70歳になったときにどうなるかということ予測できるのかということ、そういう予測はかなり難しいと思います。

それは僕らが高齢者の方の研究をするときにいつも突き当たるものではあるんですけども。例えば20代の統合失調症の方とか、強迫神経症の方とか、そういう方を対象に研究をすると、すごい均質なんです。みんな同じような症状だし、非常に研究対象としてはやりやすいんです。高齢になってくると本当にバラツキが大きくなってくるので、なかなか難しいところはあります。でもそこが高齢者の特徴なので、そうは言っても、先ほどおっしゃったような世代で共通の部分もあって、そういうバラツキの中から共通性を見つけたりしていくのが重要なんだと思います。だからやることにすごく意義があると思うんですけども、解釈のときに非常に難しいところが出てくるだろうと思うんです。

世代間の経験の違いを「時層」という捉え方を
して、考察もしましたが世代に特徴的な経験の
影響といったものについてはどう感じてられま
すか。

精神科以外とかは、あまり世代によってどうこうというのではないと思うんです。もちろん寿命が長くなったり、短くなったりとかいうレベルはあると思うんですけども、大体こういう体の衰え方をして、何十代になってくると、こういう病気が出てくるみたいなことは変わらず普遍的にあると思うんです。

僕らがやっているのは、環境との相互作用の中でい

ろいろ出てくる病気なので、元々その方が築き上げてきた経験とか対処能力とかとも関係してくるので、そういう意味では、かなり社会的なところの近くで仕事をしているということもあって関心があるということだと思います。

70歳前後の方と50代の方を比較すると、寿命
ということでは70歳前後の方が短い、その結果
かどうかは不明ですが50代の方が不安の量が多
い、調査結果に出ているんですけど先生はど
のように思われますか。

一般的に考えれば、経済的な変化ということもあると思うんですけども、年を経ることにより生物学的にポジティブなほうに振れて、ポジティブな面しか見られなくなっていくという、そういう認知機能のバイアスとか、加齢性の変化による周囲のとらえ方の違いとかも出てきますので、今の50代の方が70代になった時に、その不安感を引きずっているかどうかという、ひょっとしたら、ずっと軽減していくかもしれないですし、70代の方は意外と50代の頃はもっと不安を持っていらっかったかもしれないというのはあるかと思っています。

また、どの世代を比べてもそうなんですけれど
も、女性の方が生き方がうまいというか、元気
というか、ハッピーだというか、そういうこと
をお感じになられますか。

やっぱり高齢者の方を見ていると、それは感じます。65歳以降、会社を定年で辞めて以降、何が必要とされるかといったら、やっぱり生活のスキルだと思うので、圧倒的に生活のスキルがないですよ、男性は。

女性は認知症になっても「おみそ汁」は作れたりするわけなんです。そうすると、最低限の生活は、それで1人暮らしして何とか保っていけたりするんですけども、男性は認知症になって、元々できないのに、ちょっと能力が下がったら何もできなくなるので、そうすると、施設とかに入るかみたいな話にすぐなっちゃいます。だから、僕らが患者さんとして見ている人たちでも男女差はあると思います。それは生活機能

の違い、僕が目につくのはそういうことです。会社とかで身に付けたソーシャルな機能というのは全く役に立たないというか、必要とされなくなると思います。

30年、40年、働いてそれから解放されたと思う人もいるのかもしれませんが、その生活基盤がなくなる影響もあるのでしょうか。

勿論それはあると思います。帰属するところがなくなるということの不安感というのはすごくあります。もっと若い方の精神障害、統合失調症の方とかも、いったん発症してしまうと、社会から、学校だったり会社だったりから抜け落ちてしまうので、最初に何をするかという、仲間づくりみたいなことをやるんです。同じ病気の方同士とか。所属がないというのは凄く不安なこと、人は群れで暮らす動物なので。だから、そういうことと同じことが、特に男性で退職した後の方というのは起きやすいと思います。それは僕自身もこれから直面することだと思うんですけども、女性は、人によって性格のバラツキはありますけれども、非常にソーシャルなスキルが高いですし、何かにつけいろいろ所属を持てるというか、そういう能力は高いと思います。

男性は特にそうですね、会社という組織から出ていくというロスが大きい。

会社というのは、望んで作ったネットワークじゃないですよね。枠があって過ごしていけるので、逆に言うと、こんな現象もあるんです。アスペルガーとか発達障害の方で、ソーシャルスキルが非常に低い方が退職した途端、その人の障害が表面化するということがあるんです。会社というのはやる事が決まっていて、決まった時間に行って決まったことをやって帰るということをやっていけば、それなりにそこでやっていけるので、そういう枠が外れた途端、どうしていいかわからないということでおかしなことになってしまう方というのが結構おられるんです。今の60代とかの方は、小児の子どもころの健診とかで発達障害の項目がなかったんで、ずっとすり抜けて、何とか大学も出て仕事も就いて勤め上げていらっしゃるんですけど

も、終わった途端、問題がいろいろ表面化するというのはあります。それだけソーシャルスキルがなくてもやっていける組織だったんじゃないかと思えます、会社というのは。

会社も終身雇用でなくなり、雇用形態がどんどん変わって、ある種自由度が高まるというか、逆に居場所探しじゃないですけども、そういうスキルが求められるのかもしれませんがね。

それはあるかもしれませんが。ただ発達障害の人にとっては生きづらい世の中になっているんだろうと思います。

お父様は団塊の世代だそうですが、社会的なコメントでも個人的なコメントでも結構ですが、どう感じられていますか。

個人的な体験でしか言えないと思うんです。父は本当に会社が一番いい時、バブルの頃を過ぎて、海外出張もファーストクラスで全部行くみたいな経験をしていて、その後脱サラというか、退職してから、最後は辛かったみたいですけども、かなりリストラしないといけなかったようなので。その後、古本屋を何年かやっていて、今はちょっと病気をして辞めているんですけども、僕から見ていると、やりたいように生きたという感じはします。もちろん激しく働いていたので、その時は大変なこともいっぱいあったと思うんですけども、すごくエネルギーに、イケイケドンドンの拡大路線の中でかなりの部分を生きられた世代なので。そういう意味では、本当に他の世代にない特殊な世代ではないかと思えます。

その特殊性というのは、どういったこととお考えですか。

そうですね、団塊の世代の人たちというのは、戦後すぐに生まれて、子ども時代もすぐ手前に戦争があった時期を過ごされていて、これは勝手な私見かもしれませんが、暴力がすごく身近な世界なんじゃないかと僕は思うことがあって、全共闘とか学生運動とかかなり激しい暴力があったんですけども、あの時団塊の世代の方々は20代とかで、たかだか戦争が終

わって20数年しかたっていない時期じゃないですか。僕たちは、ずっと戦争って遠いですし、人が殺し合うみたいところは遠いですが、自分が20代の時のことを思い出して、生まれるちょっと前に戦争があって、そうやって人が殺し合っていたみたいなの、「おじさんはあそこで戦死した」とか、そんなことを聞いて肌で暴力を知っている人たちと僕たちというのは、だいぶ違って当たり前じゃないかと、暴力に対する耐性みたいなのが。当然鉄拳制裁で部活動とかもずっとやってきていますし、基本的には暴力に対する心理的な壁が低い人たちなのではないかと個人的には思っています。あまりこんなことを大っぴらに言えないんですけども、でも、それは別にその人たちの責任じゃなく、戦争というすごい暴力的な時代を身近に感じている世代と、そこから2世代離れている世代の違いだったりするんじゃないかと思うんです。

当然、団塊の世代の方も親世代はいるわけで、親世代はちょうど今から100年ぐらい前に生まれた方々。もちろん戦前教育を受けた人たちばかりでしょうけれども、戦争を経てその影響と反動と両方あるんでしょうけれども、ある種の影響を親世代から当然受けていないわけではないですね。

そういう意味で言うと、僕は今23年目か24年目なんですけれども、ずっと団塊の世代の人たちが介護者としてやってきていて、今でも70歳ぐらいの人が90何歳の人を介護しているという形で、団塊の世代の人が親を見るという関係の患者さん家族がいるんですけども、団塊の世代の方々は一生涯親御さんの面倒は看られていると思うんです。

ただ一方で、同じことは子の世代にはさせたくないという思いがすごい強いです。だから「絶対認知症になったら介護施設へ入れてくれ」とか、うちの親も言いますが、そういう世代でもあると思います。暴力的であり、でもやっぱり旧来の文化を壊したというか、壊したというと変ですけども、下の世代が辛い思いをして身を呈して親の面倒を見るという、そう

いう文化をも多分自分の世代で切り取ろうというか、止めようとしている人たちのような気がします。

今回の調査でも、団塊の世代と50代で共通なのは、子どもの世話にならないという。介護も聞いていましたけれども、「施設に入るんだ」という意見は強いですね。

多分そういう思いが始まっているのが団塊の世代くらいからのような気がします。

団塊の世代が家族を持ち始めたときに言われたのが核家族で、子どもには迷惑を掛けたくないというのは、ある種の美学というか、そういう部分もあるんですけども、一方では家族関係の希薄化を自ら選んでいるというか、その迷惑を掛けられないという感覚が、結果的には家族関係を希薄化させているようで。

一気に戦後寿命が延びたということで、団塊の世代の人たちが初めて高齢者の方を介護するようになったと思うんです。経験されたと思うので、そういう経験された方が、当然下の世代に同じ思いをさせたくないと思ったという経緯なんじゃないかと思います。戦前とか寿命も50歳とか60歳ぐらいだったので、介護そのものの概念がないですから。

健康寿命という概念も昔はあまり聞かなかった。

僕は健康長寿がすごい言われているのが違和感はずっとあるんです。医者立場で絶対そんなことは言えませんが、ただ、不健康になったからといって良いかという、それはそれでまた問題があるんですけども。アメリカみたいに高カロリーでコレステロールの高いものを食べて、心血管系でガッと一気に死ぬみたいな、そんなモデルであればいいんですけども、でもその中で後遺症を残して長生きされる方もたくさん出てきますから、なかなか難しいですね、この問題は。

オランダでしたっけ、安楽死が選べる。

そうです。オランダとスイスです。オランダとか、うつ病が治らないと言って死ぬますから。オランダの先生に聞いていると、患者さんの権利意識がすごい強

いらしいんです。自分の寿命は自分で決めるということで、医師は情報提供だけをしているみたい。ベルギーからオランダに移られた先生の話聞いたんですけども、ベルギーとオランダでもだいぶ違うと言っていました。オランダで医者をするのはあんまりよくないとっていました。

以上

第4部 むすびに

PHASE 3 を終えて

《決定木分析から》

何が幸福感に繋がるのかという問いは非常に大きなテーマであり、言わば PHASE 3 は完結編に近いテーマ設定である。一億総中流と呼ばれて歳月が流れ、格差も意識され始めているが、調査に協力できる状況も踏まえると、調査対象者は中流の 50 代から 70 代と考えられる。

そういった調査対象者は、経済面と健康面がそれぞれであれば、何よりも配偶者との関係を重要視している。いつかは仕事からもリタイアして家庭で過ごす時間も長くなる、最後まで一緒なのは配偶者だけ…といった中で幸福感の大きな心の支えとなっているのかもしれない。とは言え、配偶者のどちらかが先にいなくなる。その為にも、また既に単身である人のためにも、次なる幸福感のよりどころを社会全体で考える必要があるのかもしれない。

《有識者の声から》

インタビューを終えての感想は、楽しいとともに素晴らしいと感じた。超高齢社会について真剣に考え、自らの提案を持っていらっしやることに感銘も覚えた。一人の人間の発言として、万人に効く特效薬のようなものではないが、今の時代を生きる重要な示唆に富むと思われるものであった。

意識して世代の異なる人をお願いしたが、その世代によって社会の捉え方が異なることも大いに学ぶべき点であった気がする。以下に、4 名の方の生まれた年を示し、興味深いところをピックアップします。



昭和23年生

- 団塊の世代の自負と責任、「若い人にとってよい世の中に…」
- 介護問題への示唆、「自分らしく生きていくための介護施設…」



昭和30年生

- 好きなことを続ける…居場所や活躍の場所が時に応じて変わるだけ
- 音楽の可能性…誰でも参加できて、多様性に富み…



昭和35年生

- ワークキャリアからライフキャリア…、人生の後半期のキャリアの在り方
- 何故働きたいかの問いに「健康のために働く」と答える日本人の特殊性…



昭和46年生

- 団塊ジュニア世代だからやれること、取り組むべき課題がある
- 女性の方が生き方が上手いというか、生活のスキルが男性と違います…

「次世代高齢者研究」全体を振り返って

研究を始めるに当たっての最初のつまずきとも言える発見が、「生きがい」を問うということは事実上、研究としては難しいということであった。「生きがい」が対象物(人)であったり、行為であったりすること、そして、一般的には苦しいことであっても「生きがい」になる人もいて、分析が複雑であり、従って考察が難しいことから断念した。「老後に関する意識」ということをテーマにアプローチすることとした。

本研究のユニークネスは何とんでも「次世代高齢者」を対象にしたということである。言うまでもなく、

51 歳から 60 歳は高齢者ではない。しかし、そろそろ真剣に老後を意識しなくてはならないという年代である。老後という言葉ひとつをとっても、何歳ぐらいを指すのか、定まってはいないのだが、人生の後半戦に入ったぐらいの意識に始まり、今後の生き方を展望する。残念ながら、それらを 10 年の単位で集団としてみた結果、「次世代高齢者」の弱さ、彷徨える様ばかりが目立つといった結果であった。パートナーの有無やその関係性、親の介護、子供の独立などなど、超高齢社会、孤立社会といったことが、70 歳前後の方々（「高齢者層」と本研究では呼ぶ）以上に重くのしかかっている気がする。いつかは終わるのだが、いつ終わるのか分からない（もちろん分かりたくもない）人生の後半戦について考える、その行為そのものも不安なものであり、次世代高齢者は悩み多き年代である。

そして次のユニークネスとして、9つの座標軸という考え方を取った。最も少ないジャンル分けとしては、オンとオフ（仕事と家庭とか）の2つになるのだが、仕事、学び、趣味、配偶者、家族、友人、健康、経済、社会という9つの軸における自己の現在の位置の評価を出発点とし、老後という未来において、どういった生き方を意識するかということをも問うこととした。どの軸に依存して生きていくのか、老後は全く異なるところに向かうのか、その結果は既に述べてきた通りである（特に PHASE 1 の報告書）。

たいへん興味深かったのが次世代高齢者層、高齢者層を各々男女別に4グループのインタビューである（PHASE 2）。まさに、研究結果の通りにインタビューは展開され、男性が女性を頼りにしていることが如実に分かり、男女ともに理解しながら生活をしているといった状況であった。女性の家庭内や地域内における生活力はたくましく、残念ながら男性が会社組織で培ってきたものが、老後はあまり期待できない、頼りにできないことが晒された気がする。

そして幸福感、生活満足に繋がる要因を PHASE 3 で分析した。第一義的に経済的な支えの重要性が確認された。そして多くの「中流的老後」を迎える人にとっては、配偶者との関係の重要性が再確認でき、次は社会との繋がり方が健康状態とも関連しながら位置づけられる。

経済的に困らないこと、配偶者との関係性がよいこと、社会との交わり（交われる健康状態）といった整理ができるであろう。「何歳まで生きるかわからない」「やがて孤立してしまう」といった生活者意識から出る不安と裏腹というのか、結びついていることが分かる。

本研究においては、これらの結果から社会システムについての提案までは行わないが、次世代高齢者層、高齢者層の幸福感が高まる方策について、何らかの示唆を提供できることを望み、研究の結びとしたい。

「次世代高齢者研究」の次の研究について

研究としては更に重ねる意味は感じており、有識者へのインタビューにおいても、そのアドバイスをいただいている。また、より具体的な社会的取り組み（例えば孤独、孤立の解消）の必要性を痛感する中では、そういった具体的な取り組みに関しての研究も価値のあることと認識している。

少しインターバルを置きながら、次なる研究のあり方を検討・調整しながら今後進めたい。

「次世代高齢者研究」を 2016 年にスタートし、大勢の方々から協力を得られたことに、まずは心より感謝を申し上げて、ひとまず締め括ることとしたい。

次世代高齢者研究報告書
幸福感についての考察
～データ分析と有識者インタビュー～
(PHASE3)

発行 2019年6月
発行所 公益財団法人ハイレイフ研究所
〒104-0061
東京都中央区銀座 1-8-14 銀座 YOMIKO ビル 8階
Tel.03-3563-8686 (代表) Fax.03-3563-7987
www.hilife.or.jp

©公益財団法人ハイレイフ研究所
